

■ 発行 / 神戸市灘区六甲台町 1-1
りく そう かい
 神戸大学農学部内 六篠会
 (神戸大学農学部同窓会)
 ■ 連絡用 FAX : 078-881-2752
 ■ E-mail : rikusoukai@yahoo.co.jp

六篠会報

RIKUSOUKAI

うりぼーロード

うりぼーロードは神戸大学文理農学部と大学教育推進機構(旧教養学部)をつなぐために平成19年にできた工学部構内にある遊歩道です。

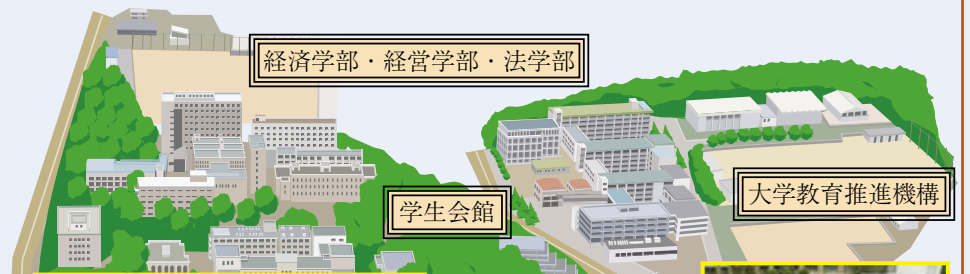
昨年の7月5日に大雨で土砂崩れがおこり、現在一部不通。復旧予定はないようです。

過去の農学部の学生も語学や教養科目(現在は教養原論)を受講しに歩いて行った道。(・・が台風21号で不通)

神大うりぼー
 神戸大学公式
 マスコット
 キャラクター



国際人間科学部



経済学部・経営学部・法学部

学生会館

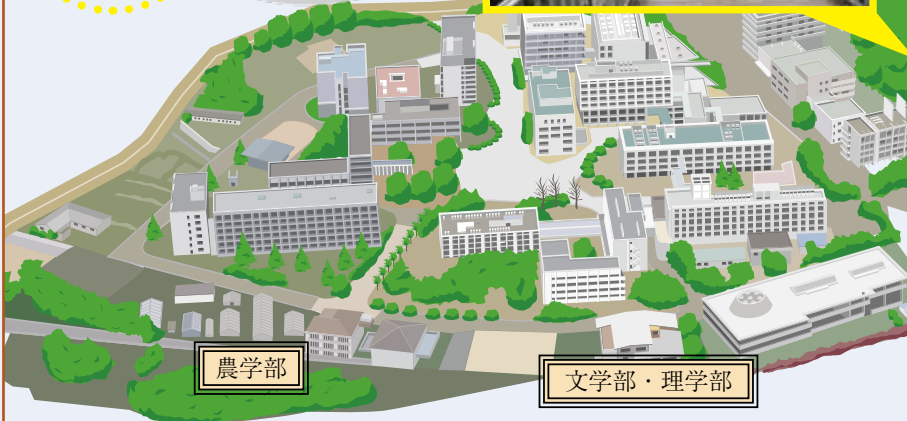
大学教育推進機構



馬場



工学部



農学部

文学部・理学部



- 六篠会会長挨拶 中村 直彦……………2
- 農学部近況報告2018 農学研究科長 河端 俊典……………3
- 農学部は今 深山 浩……………4
- 神戸大学の近況報告 神戸大学長 武田 廣……………5
- 同窓生は今… 中村 浩介……………6
- 同窓生は今… 小野 佳子……………7
- 第13回ホームカミングデイ報告 辻 荘一・西尾 司……………8
- HCD記念講演Ⅰ 六篠国際賞 土佐 幸雄……………9
- HCD記念講演Ⅱ 六篠論文賞 木村 行宏……………10
- 学友会だより 会長挨拶・KUCの活動……………11
- 支部だより KÔBE六篠会 安原 潤……………12
- 支部だより 県六篠会 片山 喜久男……………12
- 支部だより 関東支部 上山 維介……………13
- 支部だより 東海支部 長谷川 信弘……………13
- 支部だより 広島県支部 番匠 宏行……………14
- iGEMIに挑戦 松井 沙樹……………14
- 海外学術活動援助報告 船本 大智……………15

- 海外学術活動援助報告 諏訪 瑞季・伊藤 輝志……………15
- 研究室紹介Ⅰ 土地環境学 河端 俊典・澤田 豊……………16
- 研究室紹介Ⅱ 熱帯有用植物学 東 哲司・深山 浩……………17
- 六篠賞 六篠社会貢献賞 前野 浩太郎……………18
- 六篠賞 六篠学術奨励賞 宮路 直実……………19
- 六篠賞 六篠学生賞 吉崎 日菜子……………19
- 神戸大学基金—神戸大学 キャンパスシニアジュー……………20
- 神戸大学農学部教育研究振興基金……………21
- 平成30年度代議員総会報告 平成29年度庶務報告……………22
- 事業報告 学術振興事業関連……………23
- 慶弔関連 退職及び着任教員……………24
- 平成29年度収支決算……………25
- 平成30年度収支予算……………25
- 同窓会事務局の案内……………25
- 臨時代議員総会報告……………26
- お知らせ・編集後記……………26
- 神戸大学農学部創立七十周年記念事業趣意書……………27

CONTENTS

『輝かしい農学部創立七十周年記念』に想う

六篠会会長 **中村 直彦** (神Z1回)



拝啓 六篠会の同窓生及びご家族の皆様におかれましては、新春万福の良き年をお迎えのことと存じます。

今年も一年、健康に留意されるとともに、色々なことにチャレンジして有意義な年を送られますことをご祈念申し上げます。

さて、神戸大学農学部は、1949年（昭和24年）に現・篠山市に兵庫県立農科大学として建学してから、今年で70年を迎えます。戦後まもない食糧難・飢えの時代に、国民の期待に応え、食糧の増産を旗印に掲げて教鞭をとった教員と、その想いを受け止め使命感を持って勉学に励んだ同窓生、また、その後もたゆまぬ努力を積み重ね歴史を築いてきた農学部、さらに、未来の農学部に期待を寄せて、『輝かしい農学部創立七十周年記念事業』を開催することにいたしました。

当時、戦争の後遺症は、あらゆるところに残っていました。これからの行き先・目標を見失った厳しい時代に、国民が過酷な生活を強いられる環境の中で、しかも、後発組の新制農科大学の設置となると、紆余曲折の厳しい状況であったことを文献から窺い知ることができました。

しかし、戦後の食糧不足が異常なほどに深刻さを増し、「農科大学」設置への機運が高まっていたこと、また、兵庫県多紀郡篠山地区の歩兵七十連隊の兵舎が学舎に転用できたこと、篠山の地元住民が大学誘致を切望するという熱意が追い風になりました。さらに、歎ひとつなかつたところから、1948年12月の兵庫県議会で、大学設立準備金1千万円の予算が議決され、実験室5カ所の電気水道設備と付帯工事に5百万円、図書、機械・器具、農機具類、その他設備費に5百万円が充当され、工事は短期間のうちに実施されました。それが設置許可を獲得する上の大きな原動力となり、翌1949年1月の文部省の調査団において好印象を与えることとなり、また、3月1日から開かれた大学設置委員会（文部省が設置する京都大学教授団等）に理解を取り付け全員の賛成を得て、同25日に文部省の設置認可に漕ぎつけることができました。ここに兵庫県立農科大学が5月10日に開学・誕生する運びとなりました。

入学式での三宅捷（すぐる）初代学長の式辞は、「日本の革命期に一步を踏み出す本大学の理念は、農学の学理を研究し、教養高き農学者・農業技術者を養成することであり、そのことによって農業の進歩発展に貢献し、全世界の文化並びに全人類の幸福のために寄与することである。また、併せて現在の社会的要請としての食糧問題の解決を図ることの責務を負っている。」と述べています。この理念は、まさに、現在の農学部の精神に引き継がれ、

同窓生の羅針盤になっているものといえます。

兵庫県立農科大学の1回生として入学し、後年には同窓会を結成し初代の六篠会長となった西川欣一先生（現神戸大学農学部名誉教授）は、農学部創立30周年を迎えた時、このように振り返っています。「大学創立当時は、敗戦による混乱はおさまりかけたといえ、世相は未だ混沌とし、日常生活も窮迫し純白の米飯はまさに宝石の時代であった。以来30年が経過し豊かな時代に様変わりしてきたが、農学部の歩みは決して平坦な道のりではなかった。しかし、全教職員の努力の集積によって、国立移管、学科の体質改善、大学院修士課程の設置・・・と、今まさに大学の真価を世に問うまでに成長し続けている。」と。

そこで、当時の歴史、人びとの想いを、また現在の農学部の様子を、同窓生みんなが感じ取り、共有できたらとの思いから『農学部創立七十周年記念事業』を盛大に春に篠山会場で、秋に六甲会場で、と2カ所で開催いたします。

篠山会場では、創立35周年記念事業で建てた『我等が青春ここにあり』の記念碑・旧農大の学舎跡地を訪問したあと、記念式典のほか盃山を眺めながら学生時代を思い出し、デカンショ節の体験教室等の多彩な行事を企画しています。そして、この記念碑に込めた『建学精神をこれからも永遠に』残したいとの思いから、碑の設置場所を明るい雰囲気へ改修します。是非ご覧ください。

また、六甲会場では、例年どおり神戸大学の全学で行う『ホームカミングディ』の一環として午前は六甲講堂で全学行事を行い、午後からは農学部へ会場を移し、魅力満載の『創立七十周年記念事業』を行います。

この機会に大学時代を懐かしみ、同窓生との旧交を温め、新・旧の教職員との交流など、色々な出会いを大切に夢を膨らませ、新しい自分を・新しい世界を切り拓いていただきたいと企画いたしました。是非ご参加ください。



2018年10月27日 ホームカミングディにて 学長と六篠会役員



大学院農学研究科長・農学部長 河端 俊典

新年、あけましておめでとうございます。昨年は、度重なる大型台風の襲来、西日本豪雨さらに大阪・北海道における地震災害など、近年希な甚大なる自然災害に見舞われた年となりましたが、六篠会会員の皆さまにおかれましては、如何お過ごしでしょうか？ 昨年度より、宮野 隆先生の後任として、研究科長・農学部長を拝命致しましたが、あっという間に2年間が過ぎようとしております。この間、武田廣学長のリーダーシップのもと、国際化、文理融合、イノベーション、クォーター制、ポイント制などをキーワードとして、大きな変革が進展していますが、農学研究科もその特長を活かし、全学で掲げられた目標に向けて邁進していかねばなりません。

その様な背景の中、農学研究科としては、留学生の増大、外国人共著論文数の増大、教員はもちろん学生の海外派遣数の増大、英語での授業数の増大等々、より国際化に向けた具体的な数値目標が設定され、鋭意国際化への対応を遂行している状況です。

幸いにも、兵庫県と米国ネブラスカ州との姉妹連携が縁で、2月に米国ネブラスカ大学リンカーン校首脳陣が来学されました。その後、とんとん拍子で、9月には大学間学術交流協定(タイプ2)が締結され、引き続き11月には、神戸大学ホノルル拠点にて、農学研究科との連携シンポジウムが開催される運びとなりました。ネブラスカ大学は、コーンベルト地帯に所在することから、農林業、環境、動植物、食品科学の研究が盛んで、特に農学部が有名な大学であり、今後各専門分野において急速な進展が期待されているところです。

また、土佐幸雄先生を中心に、5年目になる「フィリピン大学のロスバニョス校(UPLB)」で3週間実践的な英語を学ぶ「UPLB 英語研修」8~9月を開講し、今年は35名の学生が参加しました。また、7月にはUPLBの先生が来学され、「英語プレゼンテーション」の集中講義(20名)を開催したところ、今年度も極めて人気が高く、定員オーバーで受講できない学生が現れました。この講義に関しましては、来年度より2クラス計40名に倍増させる計画です。この様に、現役学生の国際化に対する学習意欲は予想以上に高いものであると言えます。

一方、具体的な留学生確保を目的として、4年前より自然科学系5研究科で共催している「One Week Experience in Kobe University」が7月に開催され、シンガポール、タイ、台湾、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナムの提携校から18名の学生を招待し、神戸大学理系分野を紹介しました。また、昨年に引き続き科学技術振興機構の「さくらサイエンスプログラム」に、今年も継続を含めて2プログラムが採択され、7月に竹中慎治先生がタイのチェンマイ大学から10名、11月に伊藤博通先生・黒木信一郎先生が、タイのタマ

サート大学、スリランカのルフナ大学、インドネシアのボゴール大学から計24名の学生を招聘し、教育・研究を実施いたしました。

さらに、他研究科に先んじ、一昨年10月に英語の授業のみで学位の取れる、大学院英語コース「グローバルマスターコース」が設置され、現在では5名の外国人学生が在籍しています。また、来年度「グローバルドクターコース」を開設する予定で、現在準備を進めているところです。

この様に国際化の波が加速している中ですが、地元への社会貢献もやはり重要な農学研究科の使命です。1月に岡山県西粟倉村との連携協定、6月には、兵庫県東播磨県民局との連携により、東播磨フィールドステーションを開設することができました。今後は、県内外の市町村等との地域連携もさらに拡大させていかねばなりません。

また、ご存じの通り、食資源教育研究センターは、2014年に国の「教育関係共同利用拠点」に認定され、広く内外の他大学学生などに教育の場を提供していますが、9月、厳しい審査を経てめでたく再認定されることになりました。文科省の大幅な予算削減の中、全国の共同利用拠点数も減らされる傾向の中、センター教員・事務の方々のご努力により、再認定という喜ばしい結果となりました。

教員組織に関しては、「教員組織の大括り化、柔軟な運用」を目的として昨年度より本格的に運用が開始された「ポイント制」ですが、教員の若返り、女性教員の増加、バランスの良い教員配置等々が急務ではありますが、まだまだ多くの課題が山積している状況です。その中で、昨年度より助教採用に関しまして農学研究科独自の「テニュアトラック制」を導入いたしました。その結果、1月に2名の若手教員を迎えることができました。

また、10月28日に開催されました第13回神戸大学ホームカミングデイでは、好天にも恵まれ、午後から開催された農学部企画には、現役学生45名を含む総勢129名の参加と、多くの同窓生が参集され旧交を温められました。神戸大学農学研究科発展のためには、今まで以上に六篠会との連携強化が必要であることを実感いたしました。

最後になりましたが、本年度も六篠会から、学生の海外派遣補助など農学部の各種事業のために多大なご支援をいただきましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。また、来年度は農学部創立70周年となります。六篠会では中村会長を中心にさらに記念事業を計画されていると伺っておりますので、今後とも引き続き、神戸大学農学研究科・農学部の発展のため、ご支援ご協力頂きますよう心からお願い申し上げます。

資源生命科学専攻応用植物学講座
熱帯有用植物学分野

前六篠会会計理事 准教授 深山 浩 (神A24回、修22回、博後H10熱帯有用植物学)



私は応用植物学講座の熱帯有用植物学研究室に所属しています。昨年度まで六篠会理事（会計）をさせていただいたことから、今回は私から農学部の近況の報告をさせていただきます。

よく言われることですが、国公立大学の運営費交付金が削減されており、研究室に配分される研究費も少なくなっています。もちろん、神戸大学農学部も例外ではありません。私が学生の頃にお世話になった先生方が、もし今の研究室に戻られるようなことになれば、研究費の少なさに愕然とされることでしょうか。また昔と異なり、農学部の中でも多数を占める生命科学分野の研究は、遺伝子レベルでの解析が主流であり、遺伝子実験用試薬やキットは高額なものが多いことから、昔よりも研究費が必要です。よって遺伝子レベルでの研究を行うには、運営交付金から配分される研究費だけでは、非常に厳しい状況となります。そこで必要なのが競争的資金です。実は運営交付金が減った分以上に競争的資金（科学研究費補助金、プロジェクト型予算など）は増えており、トータルでは国家予算の科学研究費は微増しています。研究を円滑に進めるには、この競争的資金を獲得しなければなりません。私は、ちょうどこの六篠会報の原稿に取りかかる直前まで、代表的な競争的資金である科学研究費補助金の申請書を作成していました。

私は作物学が専門ですが、やはり遺伝子レベルでの研究を行っています。作物学の中心は栽培学であり、作物の特徴を知り、栽培法を追求することで作物の増産や安定供給を図る学問です。農業の現場に最も近い学問と言えます。そういった面から見ると、私がやっている研究は純粋な作物学ではないかも知れません。私は、光合成の初期 CO₂ 固定を触媒するルビスコという酵素の研究を学生の頃から続けていて、現在は遺伝子を改変してルビスコの触媒効率を高めることで光合成能力を改良し、最終的に収量を増加させることを目指しています。

学生の頃、と言ってももう 30 年近くも昔ですが、私は作物学会で自信満々にルビスコに関する研究発表をして懇親会に出たところ、後に作物学会会長を務められた石井龍一先生に「作物学は物差しと秤があれば出来るんだ！」とお叱りを受けました。「作物学でも、それは厳しいだろう」と当時から思いましたが、「アイデアがあれば、できることはあるんだ、安易に皆がやっている遺伝子やタンパク質の研究に流されてはいけない」というメッセージであろうと受け止めました。この言葉は、今でもたまに思い出します。もし、競争的資金が獲得出来なかったら、遺伝子実験をする予算はない。もし、そうなった場合にどうするかを考える時に、石井先生の言葉を思い出します。「アイデアがあれば、物差しと秤で実験はできる」その時が来たら覚悟を決めてアイデアを振り絞ろうと思います。

私は作物学会に毎年参加していますが、遺伝子レベルでの研究は、作物学会でも増加しています。そのような時代の流れが強まり始めた 1998 年に作物学会の英文誌 Plant Production Science が創刊されました。私はこの英文誌名が気に入っています。普通なら Crop Science なのですが、Production Science としたところに「これからは遺伝子の研究も含めて、作物の生産性に関わる研究は全て作物学を含めよう」というメッセージが込められたと記憶しています。作物学の中心が栽培学のままでは、今後の作物学の発展は限られてしまいます。

最近、ゲノム編集という新しい遺伝子操作技術が開発されています。この方法では、外来の遺伝子導入が必ずしも必要ではなく、生物が持っている遺伝子をピンポイントで改変できます。このゲノム編集は、どこに変異が起こるかかわからない従来の突然変異を利用した育種よりも安全と言えるかも知れません。ゲノム編集は農学を含めた生命科学における画期的な技術であり、これに乗り遅れると大きな損失を招くこととなります。私もイネを用いてゲノム編集で光合成関連遺伝子の改変を行っています。しかし、現在はゲノム編集した植物も遺伝子組換え体の扱いとなっていますので、限られた施設内（農学部唯一の組換え体温室：農学部ファイトトロン）で栽培する必要があります。これでは、我々が作成した作物が実際の屋外の環境で有用であるのかを評価するのは困難であり、研究の発展における大きな障壁となっています。そのような中で、今年、環境省はゲノム編集に対する取扱いの規制を緩和する可能性を示しました。これが認められれば、比較的簡単な審査を受ければゲノム編集した作物を野外で育成することが可能となります。そうなれば、作物の品種改良は飛躍的に発展する可能性があります。新しい技術を取り入れて、作物の生産性を追求することが作物学の発展に必要なものであり、私の研究スタンスにも必要です。このようなゲノム編集に追い風が吹こうとしている状況にも関わらず、物差しと秤だけで勝負することにならないよう、気を付けなければならないと思っています。



国立大学法人化後15年

神戸大学長 **武田 廣**



2004年にスタートした国立大学法人化から15年近く経過しましたが、その評価に関しては議論が尽きません。もともと、法人化は郵政民営化の流れと並行して、国家公務員数を減らすという行財政改革の一環として政治主導で起こった話であり、決して「教育研究」の充実が主眼でなかったことは肝に銘じておく必要があります。当時の文科大臣の回顧録にもあるように、当初の「民営化」案から、教育研究の特殊性を考慮した「国立大学法人」まで押し戻せたことですら綱渡りだったようです。ただし、「国立大学法人化」がその当時現場レベルでは、危機感において大改革ではあっても革命ではなかったのは、退職金と国から大学へ配分される運営費交付金が確保されるとの見通しがあったからです。

しかし、運営費交付金は法人化以後、財政健全化の旗印のもと減額され続けてきました。削減係数、効率化係数、機能強化係数と名前は変遷したものの、年率にして1%強の削減が15年間続いたのです。神戸大学の場合、2004年度の247億円から、2017年度の205億円へと、42億円もの減少です。このままでは大学運営は成り立ちません。当然、科学研究費を含む外部資金の導入を促進し、教職員の奮闘のおかげで、法人化後、外部資金は約60億円から順調に増加し続け、100億円の大台に乗るまでに至っています。金額的には、運営費交付金の減額を、外部資金で補填している形ですが、重要なことは、資金の性質が変化していることです。すなわち、運営費交付金は人件費を含む法人の裁量の経費ですが、外部資金の大半は競争的資金であり目的型経費なのです。教育研究の現場で何が起こったかという、安定的人件費の必要な法人化前の承継ポストが減り、プロジェクト対応の人件費で賄う期限付きポストが増えたのです。全国的な問題になっている若手教員ポストの減少、ポストの不安定期限付き雇用の原因がここにあります。しかし、経済界、政府諸会議では、「これは大学のガバナンスの問題であり、シニア教員の給与を削減し、若手雇用に戻すべき」との乱暴な意見もあります。

運営費交付金の削減と並行して、大学改革、機能強化の名目での補助金も難しい局面を迎えています。3年～10年のプロジェクト型の補助金が多いのですが、当初から年度が進むにつれて補助金が削減される条件が盛り込まれており、なおかつ事業終了後も規模は縮小するも、大学法人の責務として継続することが求められています。いわゆる「毒饅頭」と呼ばれるもので、目先の利益（補助金）に目がくらんでかぶりつくと、あとから自己負担で身体が痺れてくるという怖い話です。さらには、施設整備費の予算も減少の一途をたどっており、老朽化対策の営繕費確保もままならない状況が続いています。会計上の原価償却という概念が国立大学法人（病院を除く）

には無く、施設整備の概算要求は今や、宝くじを当てるようなものと揶揄されています。このような計画性、自律性の無さは、法人制度設計の誤りだと感じています。

法人化のネガティブな面ばかり書いているようですが、国立大学として改善すべき点が多々あるのも事実です。神戸大学が将来に向けて世界最高水準の教育研究機関として発展を遂げるために、現在の苦境を乗り越え、スピード感をもって、改革の方向性を示し、全学の協力体制で邁進したいと思います。学長として文部科学省や経済界の方々と接して強く感じていることがあります。それは、神戸大学の特徴は何かということです。本学は、世界の有力大学と伍して戦う教育研究大学を目指す16大学の中に入ることを選択しましたが、いかにしてそれを実現するのか。特定の分野で尖がっていることも事実ですが、神戸大学が文系・理系のバランスのとれた総合大学であることは、富国強兵のスローガンのもと理工系中心で発展してきた旧帝大系の大学とは違う大きな強みです。そもそも文系・理系という分け方は恣意的・タコツボ的で、実際に環境問題、人口問題などに代表される地球的規模の諸問題を解決するには、さまざまな分野の総合力が必要です。また、最近進展の著しい、IoT、AI、ビッグデータの取り扱いも文系・理系双方の知恵が必要です。進取、開放の気風の強い神戸大学には、これらの分野横断的な教育研究をリードしていける素地があると信じています。もちろん、大学の役割として、ノーベル賞受賞者がその都度社会に訴えかけているように、いつ役に立つかわからないような基礎的な研究分野への目配りも大切です。人間の知的好奇心が学問の進展に重要な役割を果たしていることは、神戸大学長として十分理解しているつもりです。

今後も難しいかじ取りが続くと思われませんが、六條会の皆様には、神戸大学基金等を通じて引き続き強力な支援をお願いいたします。



神戸大学農学研究所附属食資源教育センター果樹園にて梨の収穫

KAGOME SENEGAL SARL President 中村 浩介 (神BE30回 植物栄養学・博前28回生物環境制御学)



現在、アフリカのセネガルで生活しています。昨年のサッカーワールドカップで日本の対戦国として話題となったことはご記憶の方も多いのではないのでしょうか。この度、恩師である王子善清先生より寄稿依頼を頂き、お引き受けした次第です。

私の学生時代ですが、植物栄養学研究室で王子先生、杉本先生、末吉先生、白石先生にご指導いただき、硝酸還元酵素の活性制御機構の解明を行っておりました。お世辞にも真面目な学生とは言えなかったのですが、研究室に配属されてからは実験に没頭し充実した日々を過ごしました。今思えば、自分で仮説を持ち、それを検証するプロセスの楽しさに目覚めたときです。楽しい仲間にも恵まれました。神戸で過ごした6年間の仲間には今でも大変感謝しております。

そして就職活動。毎日たくさんの履歴書とエントリーシートに苦闘したのを覚えています。自分には何ができるのか、何がしたいのかを真剣に考えた日々でした。たくさんの人々の健康に寄与できたら、と思い製薬業界と食品業界にアプローチした結果、カゴメ株式会社に縁をいただきました。

入社してから配属されたのは研究開発部門で、与えられたのは加工用トマトの品種開発という業務でした。トマトは加工用と生鮮用とは全く異なる品種が使用されており、加工用品種は露地で無支柱栽培します。カゴメは契約農家の方々に栽培していただく加工用トマトを品種から開発しています。品種開発では、種から食卓までのバリューチェーンの中で、契約農家、工場、消費者、といった受益者にどのような利益をもたらすのかという開発目標を設定し、実現に向けて仮説と検証を繰り返します。最終的に使用する商品は同じものであっても、同じものを作るための原料となる品種は時代や環境に合わせて変え続けています。

私は、恥ずかしながら入社するまでトマトを育てたことはなく、実験材料となるコマツナを水耕栽培する程度だったので、農家の方々と対等に話をできるようにトマト栽培と農業について学びなおしました。そして、新品種を開発する技術のみならず、加工して販売するという製造業としての知識も日々勉強でした。国内で栽培する加工用トマトの品種開発から始まり、入社4年目からは海外向けの品種開発も加わり、国内外の加工用トマト産地へ飛び回りました。海外では、コミュニケーションや習慣の違いに戸惑うことは当然ながら、時に自分の担当の枠を超えて、幅広い知識や対応が要求され、冷汗もかきましたし、苦い経験もたくさんしてきました。

品種開発いう時間のかかる仕事をしてきただけに、自分の開発した品種が畑一面で栽培されたときや、新品種がきっかけとなった新商品が発売されたときには達成感がありました。与えられた舞台でがむしゃらに没頭し

てきましたが、こういった経験が次の仕事への駆動力となってきたのだと思います。量販店の棚でいつも変わらずに陳列されているかもしれませんが、商品に詰まったこんなストーリーも思い出しながら手にしていただければ嬉しい限りです。

入社して14年目、カゴメの海外拠点があるポルトガルに農業ビジネスを研究開発する会社を設立することとなり、そこへ出向することとなりました。種苗開発から栽培技術、加工技術まで含めた農業技術資源から事業開発をするための会社です。ICTを活用したスマート農業なども対象で、新しい事業のタネをまく仕事です。冒頭にも触れましたが、今、アフリカのセネガルにおります。ポルトガルでの業務のひとつに、新しい加工用トマトの産地開発があり、アフリカを担当していました。アフリカの中からセネガルを選び、そこに特化することになったのです。

私の業務は、セネガルでトマト加工産業を育成することです。アフリカではトマトペーストを中心としたトマト加工品が基礎調味料として定着しており、たくさん消費されています。しかしながら、その大半が輸入品です。農業生産性が低く、原料としてのトマトが十分に生産できないことが原因です。私はこれを地産地消に変えていくため、まずはトマトの生産性を高める挑戦をしているところです。

カゴメでは、トマトに関わる仕事を楽しむ人を「トマト野郎」と呼びます。私もそんなトマト野郎として畑に出て、セネガル人と一緒に汗を流し、奮闘している日々です。水が出ない、電気が止まる、雨が降れば容赦なく雨漏り、など異国の地での生活は不便も多いですが、現地生活を楽しんでいます。

末筆ながら、あらためて回顧する機会を与えてくださった王子先生、六篠会の運営に携わってくださっている皆様、ありがとうございます。そして、六篠会の益々の発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたします。



トマト圃場にて

サントリーウエルネス株式会社 健康科学研究所研究主幹 小野 佳子 (旧姓：豊田) (神C17回食品及び栄養化学)



私は1986年に農芸化学科・食品及び栄養化学研究室(名武昌人 研)を卒業し、卒業後は、モノづくりに携わりたいと思い、サントリー(現 サントリーホールディングス株式会社)に入社しました。名武研には3つのグループがあり、私は名武先生のグループで小原章裕さん(現名城大教授)と水野雅史さん(現 神戸大教授)の下で、アミノ酸と亜硝酸の反応によりできる変異原性物質の同定の研究をさせていただきました。ちょうど食品の調理過程で変異原性(ガン原性)物質ができるという研究が盛んに行われていた時期でした。私の仕事は、研究というよりもっぱら大量の試験管、キャップ、シャーレやチップ(当時は洗って使っていました!)を丁寧に洗う事だったように思いますが、楽しかった記憶が蘇ります。サントリーの最初の部署は安全性評価部門でしたので、大学時代の経験が役に立ったことになり。そして、最初の上司の奥様が中学時代の担任の先生だったことも判明し、世の中って狭いな、と感じたことも思い出されます。その後、10年ほどして、安全性から機能性評価部門に移り、そのころから、主にセサミン(ゴマリグナン的一种)の研究を担当させていただき、今に至っています。組織変更により、グループ名は色々変わっています(現在は食品機能研究G)が、一貫してセサミンの研究を中心に、植物に含まれるポリフェノール等の効能評価に従事しています。

研究により新しいことを発見するのは大きな楽しみですが、もう一つの楽しみは、年に1・2回、国際学会や海外のコラボレーターとのMTGのため、海外に行けることです。思い出深かったのは、2年に一回開催されるポリフェノールと健康国際会議(International Conference on Polyphenol and Health: ICPH)で訪れたアルゼンチンです。ワインの美味しい国としてチリが有名ですが、アルゼンチンのワインはとても美味しく驚きました。アルゼンチンでは、美味しいワインを国内で消費してしまっていて、あまり輸出していないからだそうです。牛肉もおいしかったのですが、最も印象深いのは、学会後に訪れた「イグアスの滝」です。その壮大さと迫力に圧倒されました。手が届きそうなくらいの距離に、すさまじい量の水が流れ落ち、ずっと見ていると滝に飲み込まれそうな感覚でした。私はアルゼンチン側からしか見ていませんが、ブラジル側から見ると、滝全体を見渡すことができるようです。皆さまもチャンスがあれば是非見に行ってください。超お勧めです。

私のグループは女性が多く、私を含めて女性5名と男性1名の6人で活動しています。若いメンバーから主婦の方まで、さまざまな状況下でワークライフバランスの維持を模索しながら頑張っている仕事をしてくれています。

女性は結婚・出産により生活環境がかなり変化し、仕事の継続という意味では大きな制約になりますが、少しの間お休みしたりペースを落としたりすることは、長い人生の中でほんの一瞬の事だと思います。女性の活躍に向けていろいろな制度も整備されつつありますので、もっと女性が積極的に仕事を続けて活躍して欲しいと思います。

見かけによらず(?) 出不精で、週末は平日に取ったビデオ(特に刑事ドラマが好き)を見ながら、家でゴロゴロするのが常ですが、一つアクティブな趣味があるとなれば、スキーです。初めてスキーをしたのは高校の修学旅行で、その後会社でスキー同好会に入って経験者に丁寧にご指導いただいたこともあって、夢中になっていました。山頂から見る白銀の世界は最高で、特に日本アルプスの山並みは絶景です。また、滑りおろすときに風を切る感覚がたまりません。今でも年2・3回は家族や友達とスキーに行っています。今年のお正月は念願のカナダのウイスラースキー場に行ってきました。ウイスラースキー場はブラッコム山とつながっていて、本当に壮大なスキー場でした。残念ながら体力が持たず、もっと若いころに来ればよかったと後悔する私でした。いつまで続けられるのか正直わかりませんが、のんびり優雅に楽しみながら、長く続けられればいいなあと思っています。

仕事の話に戻りますが、私の所属するサントリーウエルネスでは「老化を科学する」という大きな研究目標を掲げて、健康寿命の延伸にいかに関与できるかに取り組んでいます。セサミンEXは弊社の基幹商品で、研究は30年以上、そして商品も発売して25年になります。継続して摂取していただいているお客様のためにも、さらに研究は深化させていきたいと思っています。私事ではありますが、セサミンの研究開発では2008年に日本農芸化学会技術賞をいただきました。また、2017年には日本農芸化学会女性企業研究者賞をいただくことができました。この賞は、企業において顕著な研究あるいは開発をした女性に贈られるもので、2017年に新設されたものです。同僚の男性社員からは、「女性だけあっていいですね。僕もほしい。」と言われ、「確かに」と思ったりもしましたが、企業では研究部門とはいえいろいろと制約があり、いわゆる研究者としては未熟者ではありますが、このように評価していただけるチャンスを頂けたという事はとても幸せなことであり、私自身も大きな励みにつながりました。サントリーは定年が65歳になりましたので、まだまだ先は長く、いつまでこの仕事を続けるはわかりませんが、楽しみながら研究開発活動を続けていきたいと思えます。

第13回ホームカミングデイ報告

六篠会副会長 辻 莊一 (兵Z12回家畜育種学)
理事 西尾 司 (兵Z16回家畜衛生学)

10月27日、前日までの天気予報は雨で傘の心配をしておりましたが、9時前には雨は上がり、絶好のホームカミングデイ日和となりました。第13回ホームカミングデイの式典が例年通り、六甲台出光佐三記念講堂で開催されました。司会は例年通り、朝山くみさん(H11, 経済卒)で、学長、学友会長の挨拶に続き気象庁長官橋田俊彦氏(S55, 理卒)の「私の神戸の始まり物語、変動する地球、ヒトと社会と」と題する講演が行われ、続いて、学生の発表が行われました。その一つは課外活動団体、オフショアセーリング部の活躍で、他は神戸大学基金による支援を受けて海外に出かけた学生二人の体験の紹介でした。オフショアセーリング部はフランスのヨットレースの世界学生大会で優勝したことが、寺前さん(農)から紹介されました。他方、農学部2回生の寺井さんがベトナムで枯葉剤の影響下、障害を受けた子供を支援するボランティア活動に参加したことを紹介しました。今回のホームカミングデイは学生の発表が秀逸で、いずれも農学部的女子学生が大活躍でした。

午後からは、農学部会場を移し、農学部長の挨拶、六篠賞の授与式に引き続いて六篠賞受賞者の講演、更には、卒業生、学生の講演がありました。今年度の六篠賞の受賞者は、六篠国際賞が土佐幸雄教授で、そのタイトルは「コムギいもち病菌の出現・進化機構」と題する研究です。超一流の科学雑誌「サイエンス」に論文が掲載されたものです。六篠論文賞は木村行宏助教でタイトルは「暗所で光合成する微生物」と題する研究で、一流の科学雑誌「米国科学紀要、ProNAS」に論文が掲載されたものです。六篠社会貢献賞は、国立研究開発法人国際農林水産研究センター研究員 前野浩太郎氏で、タイトルは「バッタを倒しにアフリカへ(光文社新書)」です。氏はこれまでに第71回毎日出版文化賞特別賞など複数の賞をすでに受賞されておられます。現在も海外出張中で今回授賞式への参加はならず、講演も見送られました。次に学生の発表は、松田紀美さん(D2)が「母子世帯の母親の食意識・食行動に関する研究」、高田典季さん(卒業生)が「高等植物の貯蔵脂質合成に関する遺伝子単離と機能解析」、岡田萌子さん(D1)が「近縁野生種の育種利用に向けたコムギ種間雑種の遺伝的解析」と題してそれぞれ発表し、締めくくりに懇親会が開催され盛会の内に総ての行事が無事終了しました。今回は、この式典に並行して学生の就職に関する相談会が午後2時半から2時間2つの教室で開催され、企業や官庁に就職した卒業生13名が来学し、30名ほどの就職希望の学生との間で活発な質疑応答がされました。学部主導の企画ではありますが、六篠会の関わる初の試みで、六篠会の学生就職支援活動の一つです。なお、今回参加した卒業生の所属する企業・団体名は以下の通りです。富山県高岡農

林振興センター、京都府農林水産部、江崎グリコ(株)、大阪府北部農と緑の総合事務所、奈良県農村振興課、(株)池田泉州銀行、ハウスウエルネスフーズ(株)、UCC上島コーヒー(株)、兵庫県農政環境部、中部電力(株)、菊正宗酒造(株)、(株)オネストです。来年度以降も益々多くの卒業生が来学され、現役学生との交流を深められることを期待します。六篠会は引き続き農学研究科とタッグを組んで学生の就職活動を支援していきます。



農学部企画
記念講演会



卒業生による
業界紹介



懇親会

六篠国際賞

コムギいもち病菌の出現・進化機構

生命機能科学専攻農環境生物学講座 植物病理学教育研究分野

教授 土佐 幸雄



この度は、栄えある六篠国際賞を賜り誠に有難うございます。受賞対象となりました Inoue et al. (2017, Science 357:80-83) の概略についてご紹介したいと思います。

今、世界の食料生産の脅威となりつつある植物病原体があります。コムギに特異的病原性を有する糸状菌、コムギいもち病菌（以下コムギ菌）です。本菌は、1985年、突然ブラジルで出現しました。その後、ポリビア、パラグアイ、アルゼンチンなどの周辺諸国に広がり、南米におけるコムギ生産に大きな被害を与えるようになりました。2012年には、ポリビアで、極めて病原性の強い強病原力菌（B71）が出現しました。

ただ、1985年の出現後30年間は、本病は南米の病気であるとされていました。ところが、2016年、バングラデシュで突如コムギいもち病が発生しました。本病は瞬く間にバングラデシュ各地に広がり、同国のコムギ栽培に大打撃を与えました。これは、アジアおよびユーラシア大陸における初めてのコムギいもち病の発生でした。これを引き起こした菌を調べたところ、B71と同じ系統であることが判明しました。突然発生した本病に対し、バングラデシュの研究者・農業関係者は有効な科学的対応策を持たず、とった対応は立毛中のいもち病発生ほ場に火を放って焼却すること、そして翌年のコムギ栽培をやめるように農家に指導することのみでした。

世界第2位のコムギ生産国である隣国インドは、厳戒態勢で推移を注視していましたが、2017年、インドでも本病の発生が報告されました。このように、本病は、「パンデミック病」（世界的流行病）になりつつあります。

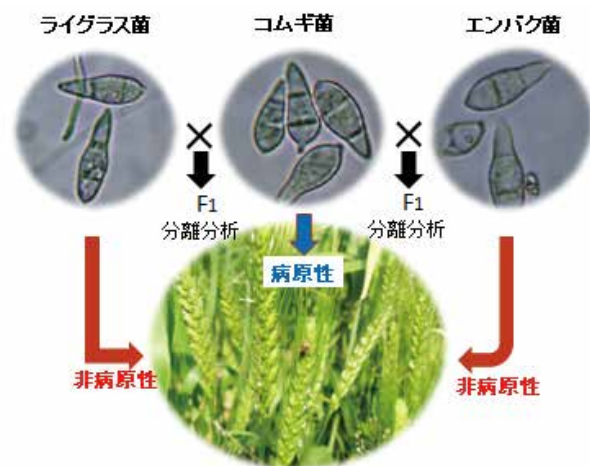
我々は、このコムギ菌の進化機構の解明に着手しました。まず、コムギ菌がなぜコムギに寄生できるようになったかを解明するためには、コムギ菌に近縁の菌がなぜコムギに寄生できないかを調べればよいと考え、そのような近縁菌としてエンバクいもち病菌（以下エンバク菌）を選びました。エンバク菌とコムギ菌を交雑し、そのF₁をコムギに接種して分離分析を行った結果、エンバク菌がコムギを侵せないのは、エンバク菌が「非病原力遺伝子」を2つ持っていて、これらがコムギのもつ抵抗性遺伝子 *Rwt3*、*Rwt4* にそれぞれ認識されるためであることが判明しました。メンデル遺伝学的に同定したこれらの非病原力遺伝子を *PWT3*、*PWT4* と命名しました (Takabayashi et al. 2002)。その後、これらの遺伝子の分子マッピングを進める一方、コムギ菌に近縁の菌としてもうひとつペレニアルライグラスいもち病菌（以下ライグラス菌）を選び、これとコムギ菌を交雑して同様の分離分析を進めました。その結果、ライグラス菌がコムギを侵せないのは、ライグラス菌が持つ非病原力遺伝子によることが判明し、そのうち重要な役割を果たすものを *A1*（仮称）としました (Vy et al. 2014)。

*A1*の分子マッピングを進めたところ、興味深いことに、これが *PWT3* と同じ座に座乗することが分かってきました。このことから、*PWT3* は、コムギ以外の植物に寄生するいもち病菌が「コムギに寄生できない」ことを支配している極めて重要な遺伝子ではないか、と考えました。異なった出発点から追い求めてきた遺伝子が同一のものであると分かったとき、換言すれば、異なったラインが交差したとき、全体像が姿を現しました。*PWT3* をクローニングしたところ、141アミノ酸からなる分泌タンパク質をコードしていました。*PWT3* を破壊するとライグラス菌がコムギに対する病原性を獲得することから、単一の非病原力遺伝子の機能欠失によってライグラスからコムギへの「ホストジャンプ」が起こると考えました。

実際、コムギ菌の *PWT3* には、トランスポゾンの挿入や塩基置換などさまざまな変異が起こっていました。一方、コムギ集団における *Rwt3* (*PWT3* を認識する抵抗性遺伝子) の保有状況を調査した結果、コムギは一般的に *Rwt3* を保有しているが、1980年代初頭のブラジルにおいて CIMMYT の半矮性品種が導入されて奨励品種となり、品種転換が起こったことが判明しました。この半矮性品種はブラジルの気候によく適応し高収量をあげたのですが、皮肉にも *Rwt3* を欠落していました。

このことから、この *Rwt3* 欠落品種にライグラス菌またはその近縁菌が寄生し、その上で増殖する中で *PWT3* に機能欠失変異が起こって *Rwt3* 保有品種に対する病原性をも獲得し、最終的に全コムギ品種に病原性を示すコムギ菌が成立したと考えました。このモデルは、*Rwt3* 欠落品種がホストジャンプの springboard (跳躍板) になったことを示しています。換言すれば、*Rwt3* 欠落コムギ品種の栽培という人間の活動が、コムギいもち病菌の進化を促したということができそうです。

この研究は、多くの共同研究者のご協力、研究室学生諸君の努力の賜物です。ここに心より御礼申し上げます。



いもち病菌宿主特異性の分離分析

六篠論文賞

暗所で光合成する微生物

生命機能科学専攻応用生命化学講座
微生物資源化学教育研究分野
助教 木村 行宏



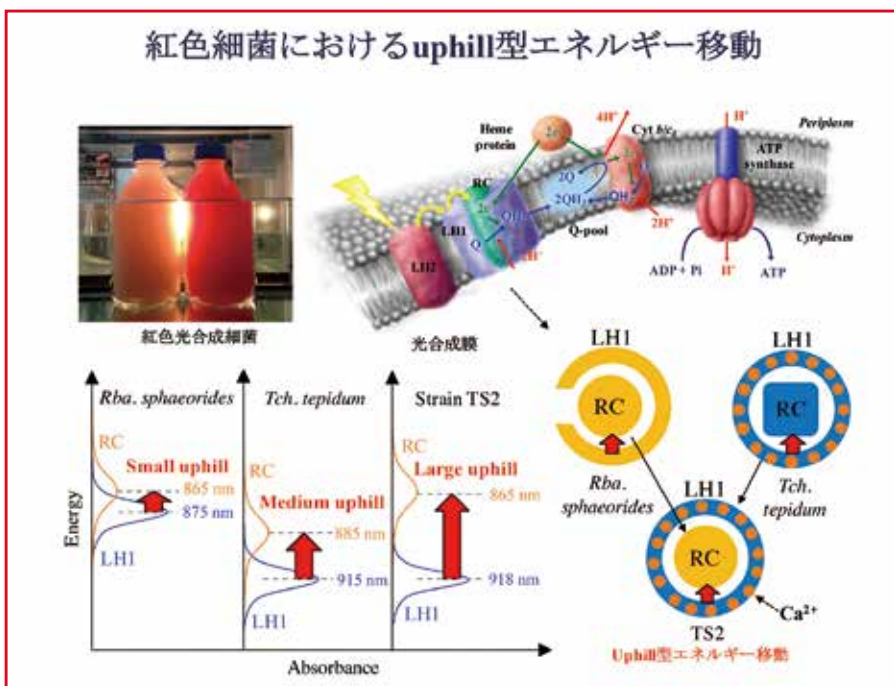
この度は六篠論文賞の栄誉を賜り、誠に光栄に存じます。六篠会の役員および選考委員の皆様方に心より御礼申し上げます。受賞の対象となった研究業績は「ハイブリッド型光合成細菌を用いた光合成の構造と機能の解明」(Proc. Nat. Acad. Sci. 114, 10906-10911, 2017)です。本研究は以前に所属していた環境分子物理化学教育研究分野と現在所属している微生物資源化学教育研究分野における研究成果であり、ご指導いただいた先生方、根気強く実験に取り組んでくださった大学院生、そして共同研究者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

光合成生物は太陽光を利用して炭酸同化を行う天然の光-物質変換システムを備えています。高等植物やシアノバクテリアなどの酸素発生型光合成生物は、比較的エネルギーの高い可視光を利用して光合成を行っております。一方、地上に降り注ぐ太陽光の約4割は不可視で低エネルギーの近赤外光であり、原始の光合成生物である紅色光合成細菌はこの近赤外光をエネルギー源に光合成を行うことができます。その中心的役割を担っているのが光捕集1反応中心複合体(LH1-RC)と呼ばれる巨大な色素タンパク質複合体です。LH1-RCでは、LH1からRCへのエネルギー勾配を遡る uphill 型のエネルギー移動が起こっています。これは、一見すると自然の法則に矛盾する現象です。「紅色細菌が如何に低エネルギー状態から高エネルギー状態を生み出しているのか?」、その分子機構の解明は光合成研究に残された重大な課題の1つとして現在も研究が進められています。

Thermochromatium tepidum は、米国イエローストーン国立公園で採取された好熱性の紅色光合成細菌であり、他の紅色細菌よりも低エネルギーの近赤外光を利用し、大きな uphill エネルギーギャップを遡って、光合成を行うことが知られています。我々は、*Thermochromatium tepidum* について詳細な解析を進め、この特性が LH1 の C 末端側に結合したカルシウムイオンに起因することを見出しましたが(Kimura et al. J. Biol. Chem. 283, 13867-13873, 2008, Kimura et al. J. Biol. Chem. 284, 93-99, 2009)、その詳細な分子機構の解明にまでは至りませんでした。そこで、茨城大学、神奈川大学との共同研究により、遺伝子改

変が可能である紅色細菌 *Rhodobacter sphaeroides* の系で *Thermochromatium tepidum* 由来の LH1 を発現させたハイブリッド型 LH1-RC (TS2) および TS2 の部位特異的変異株を作製し、生化学的、物理化学的手法を用いて詳細な解析を行いました。まず、*Thermochromatium tepidum* や TS2 が低エネルギーの近赤外光を利用できるのは、カルシウムイオン結合による LH1 タンパク質の構造変化が、水素結合を介して色素-タンパク質間相互作用を変化させることにより、バクテリオクロフィル色素分子の配向状態を制御しているためであることを見出しました。また、そのカルシウム結合サイトの形成には特定のアミノ酸残基とユニークなアミノ酸配列が重要であることを明らかにしました。さらに、uphill エネルギーギャップが大きいほど光合成反応の速度は遅くなりますが、それにも関わらず正常な光合成生育を示す理由の一つとしてカロテノイドが関与していることが示唆されました(Nagashima et al. Proc. Nat. Acad. Sci. 114, 10906-10911, 2017, Kimura et al. Biochemistry 57, 4496-4503, 2018)。

現在は、さらに低エネルギーの近赤外光で光-物質変換を行う紅色光合成細菌について詳細な解析を進めています。近赤外光電変換の分子メカニズムを明らかにすることにより、未利用のエネルギー資源である近赤外光を有効に活用できる技術の創出を目指して、今後も研究に取り組んでいく所存です。





神戸大学学友会の現執行部は、会長：原俊雄、副会長（兼）幹事長：中村直彦、副会長：神吉行彦、監査：平松秀則、監査：水池由博とで、学友会・学部同窓会の発展と神戸大学への支援を目的として、日々精一杯努力しております。任期は2年間で、2019年3月に改選を迎えます。昨年度の六篠会の会誌に、学友会の中に4つの分科会を設立して活動することを書きました。今回は、その実行の経過をお伝えします。

第2分科会は同窓会の組織強化ですが、この1年間で広島県と石川県に支部が新たに発足しました。現在、国内13支部、海外5支部があります。

第3分科会は大学への寄付金・基金の収集に協力することです。その手始めとして、「神戸大学の挑戦を支える神戸大学基金」の資料を各学部同窓会が自らの同窓生に発送している同窓会誌に同封します。次なる支援としては、卒業生が協力しようと思えることは何かを探り、それを重点的に推し進めて行くことだと考えています。学生・大学院生の海外留学基金への支援は、その一つだと

思います。

第1分科会は、ホームカミングデイ等への協力を更に強力で推し進めており、そして第4分科会は、若い世代が帰属する同窓会組織としての「若者サロン（仮称）」の創設の現実的な方策を探っております。

以上の事は、学部同窓会のご協力が必要不可欠です。よろしくご願ひ申し上げます。



武田廣学長を囲む会にて

KUC の活動

六篠会副会長（KUC担当） 石賀 暢一 (神C1回読群生産学)

KUC（神戸大学クラブ）は、神戸大学各学部の同窓会の垣根を越えて、神戸大学卒業生の親睦と交流を図るために、会員制の同窓会クラブとして1983年に創設されました。

東京には東京六甲クラブ、大阪には大阪凌霜クラブがあり同様の活動を行っています、KUCの会員であれば両クラブの会員扱いになります。

今年度から若い会員への応援をしたく、平成卒の方への講演会等の会費の優遇を行うことにしました。

KUCは各学部同窓会から選任された運営委員によって運営されています。六篠会から運営委員として坂井永利（兵A12）、王子善清（兵C12）、石賀暢一（神C1）の3名が活動しています。

H30年度の活動は次の通りです。

(1) 定例講演会の開催（年3回）

1回目：8月30日 滝川 雅弘（クラリネット）ほかカルテットによるジャズコンサートを開催しました。

2回目：11月15日 神戸新聞社社長 高士 薫氏による「県政150年・神戸新聞120年」と題し

て講演をしていただき、90代の会員から平成卒の方まで多数の方の参加をいただきました。

3回目：2019年1月24日 神戸大学 武田 廣学長の講演会を楠公会館で開催しました。

(2) 見学会の開催（年1回）

3月30日に海事科学部の「深江丸」でクルーズを楽しみました。

(3) KUC 同好会の開催状況

① KUC ゴルフクラブ（年4回） 今年は6、8、11、3月に垂水ゴルフクラブで開催 毎回30名前後の参加

② 英雄を語る会（原則として奇数月の第2火曜日に開催）

③ 囲碁同好会（原則として毎月第3月曜日に「海洋会」で開催、毎回10名～20名の参加）

(4) 広報活動

神戸大学のホームページに神戸大学クラブ（KUC）の各種活動を掲載しています。

KOBE六篠会

会長 安原 潤 (神戸A15回保蔵加工学)

2014年11月に会長に就任しました安原潤です。KOBE六篠会は、兵庫農科大学、兵庫県立農業短期大学及び神戸大学農学部を卒業し、神戸市に勤務する者を会員として、1984年に結成されました。現在は、会員148名(現職会員77名、OB会員63名、名誉会員8名)を数えています。

会員の採用区分は教職、農業、化学、衛生監視から一般行政まで幅広く、また勤務先も小・中学校(教員)、環境局(廃棄物や環境保全の業務)、保健所(食品衛生・環境衛生・動物衛生の業務)、経済観光局(農・水産・畜産業の農政振興の業務)、建設局(道路、下水道、公園などの土木関係の業務)、水道局(水質検査などの業務)、区役所(まちづくりなどの業務)など多岐にわたっています。市民に身近な業務として安全で安心なまち「こうべ」の実現に向けて、それぞれの職場・立場で会員一丸となって取り組んでいます。

では、KOBE六篠会の現況を会員3年目(2016年卒)になる北園弓佳(食料生産環境工学科)さんに紹介させていただきます。

私は、2016年度に環境職で採用され、現在は環境局環境政策部環境貢献都市課に勤務して3年目です。仕事内容は、持続可能な社会の実現に向けた地球温暖化防止に関する施策の展開です。人に、自然に、地球に、未来に貢献する「環境貢献都市 KOBE」の実現をめざし、省エ

ネルギーの推進、太陽光やバイオマス等の再生可能エネルギーの普及促進、世界に先駆けた水素サプライチェーンの構築や水素発電等革新的技術開発の推進に取り組んでいます。「環境貢献都市 KOBE」の推進は、神戸市の主要な施策の一つに位置づけられています。先進的な取組を行うことは、世界の環境問題に貢献でき、神戸の産業の活性化にもつながる可能性があります。今後も神戸の未来を見据えたよりよい環境づくりを目指してまいります。

なお、本会の活動は、年1回の総会・懇親会の開催と名簿の発行が中心となっています。総会・懇親会では、農学研究科長や六篠会会長等のご出席をいただき、大学の近況を伺ったり、思い出話に花を咲かせたり、会員間の情報交換を進めたりと親睦を深める良い機会となっています。今後とも、「同窓生意識」をより一層高めていく努力を続けていきたいと考えています。



県六篠会

会長 片山 喜久男 (神戸A14回作物学)



県六篠会は、兵庫県庁に勤務する兵庫農科大学、神戸大学農学部出身者等を会員とする親睦組織です。行政、普及、研究の各分野で本県農林水産業の推進に向けて取り組んでいますが、その活動の一端を若手の富原工弥さんから紹介します。

『私は2013年に農学職として採用されました。初任地である南淡路農業改良普及センターでは花きや青年クラブ担当の農業改良普及員として直接農業者と接し、技術や経営の指導にあたりました。』

2018年に現在の職場である兵庫県立農林水産技術総合センターに異動となり、病害虫部で害虫防除の業務を担当しています。

兵庫県では、環境創造型農業(人と環境にやさしい農業)を本県農業の基本としています。その理念に基づき、現在、化学合成農業に依存しない害虫防除技術を研究しています。性フェロモンや黄色灯など、昆虫の習性をうまく利用した研究には虫の気持ちになることが不可欠で、非常に興味深くやりがいを感じています。

今後も普及活動で培った観察力を活かし、現場ニーズに寄り添った試験研究に取り組んでいきます。

県六篠会では、7月に六篠会会長、理事や農学研究科長等に御出席いただき、恒例の総会・懇親会を開催しました。当日は農学部の取り組みについてご報告いただいた後、当会員も品種改良に携わった酒米新品種の Hyogo Sake 85 を使用した日本酒で乾杯し、大学時代の思い出や近況を語り合い、楽しい時間を共有しました。

今後ともこのような活動を通じて会員間の絆をより強めていくとともに、来年は農学部創立70周年を迎えることから、大学との交流をより深めることができる新しい企画ができればと考えていますので、今後ともよろしくお願いたします。



関東支部



支部長 上山 維介 (神C3回生物化学)

第21回関東支部総会は昨年10月12日に神戸大学東京六甲クラブで開催され、私新支部長と新役員の中永隆介氏(神C3回)、古家健二氏(神C14回)が就任しました。来賓に本部から中村直彦会長、大学から河端俊典農学研究科長・農学部長をお迎えして総勢31名が参加し、和気藹々に交友を深めました。中村会長からは、大学との連携、学友会の機能推進、2019年度の農学部創立70周年の記念行事について、河端農学研究科長からは、研究費等々厳しい環境に置かれる中、大学の更なるランクアップに、海外の大学との交流による国際化の話がありました。講演は、北興化学工業(株)元取締役専務・小川裕二氏(神P4回)から、「農薬が果たしてきた役割および農薬ビジネスの変遷と今後」と題して、農薬の役割・市場、バイオテクノロジー、作物のライフサイエンス、また、ビジネスモデルの進化をグローバルな観点からお話いただきました。懇親会では、初参加の8名の方から自己紹介と近況の報告をいただき、「神のまにまに」を飲み交わしながら終始和やかなうちに閉会となりました。

今年の農学部創立70周年の記念総会は、多くの卒業生に参加いただける設営を考えたいと思っています。関東支部は20年を経過し、この間、住所を変更された方や新しく関東に来られた方の名簿は、知人、友人を通じて更新する手段しかなく、より一層の皆様のご協力をお願いします。



東海支部



支部長 長谷川 信弘 (兵C16回農産製造学)

2017年11月19日の支部総会以降、2018年6月10日に支部役員会を開催し、本年度の活動計画を提案し、8月7日に具体的な支部総会案を作成しました。そして、11月4日には、岐阜県多治見市で見学会と支部総会を開催しました。多治見市での見学会につきまは、多治見市在住・兵Z16回の吉村俊紀氏の企画で、古墳時代から続く六古窯(瀬戸焼、常滑焼、越前焼、信楽焼、備前焼、丹波立杭焼)の内、瀬戸焼に近い美濃焼の産地である多治見市を訪問しました。当地では、美濃焼の手法を取り入れたモザイクタイル造りが盛んで、「モザイクミュージアム」と「おりべストリート」を見学しました。この界限は、篠山本通りに似た風情です。丹波篠山の立杭焼は、私も農大時代に訪れた事もあり、素朴な感じですが、モザイクタイルは昭和10年頃量産化されただけあり、斬新な感じですが、台所・風呂・タバコ店等、昭和初期の生活を思い起こします。東海地方近隣には、常滑焼(愛知県)・信楽焼(滋賀県)・万古焼(三重県)があります。東海地方に来られた時には、見学をお勧めします。10月27日の神戸大学ホームカミングデーでは、神戸大学農学部生

の活躍が記念式典で紹介されていました。又、農学部行事の発表会でも、最新の話題が提供されていました。農学部卒業生として、神戸大学の寄与と発展を期待するものです。卒業生の皆様も、支部総会・ホームカミングデーに参加される事を切望します。尚、今回は、吉村俊紀氏のお世話になりました。本紙面で御礼申し上げます。



広島県支部

支部長 番匠 宏行 (兵Z13回畜産学第1)



六條会広島県支部は2008年2月に設立し、少人数ながらも毎年1回総会を継続しています。初回と2回目は広島市内のホテルで、3回目は尾道市（燻りの館：北浦会長参加）で、4回目は東広島市（西条酒まつりに便乗：能宗副会長参加）で、5回目は福山市鞆町で、6回目は広島市内（広島菓子博2013に便乗：王子会長参加）で、7回目は江田島市から呉市のルートで（辻副会長参加）、8回目は（戦後70年・平和記念：王子会長参加）広島市内で、1昨年の9回目は瀬戸内海の大久野島（野生のウサギで有名）で（中村会長参加）「カーブ優勝記念・癒しの島2016」総会を開催しました。

2017年は秋に2回の役員会を実施し、2018年2月が丁度10年目を迎えるということで、総会を結成10周年記念行事と銘打ち、2月24日（土）の開催にして、少し豪華に1日を過ごそうと決めました。

当日は11時に広島駅集合で中村会長とも合流し、広島港からクルーズ船「銀河」に乗船し、12時に出航後、総会（事業と会計報告）と昼食懇親会を船内で行いました。中村会長からは10周年記念総会開催への祝辞、支部活動

の今後の展望、白鶴酒造と神戸大学とで共同開発した日本酒「神のまにまに」の紹介、神戸オリーブ園復活プロジェクトのお話し等をして頂きました。13時半頃に宮島港で下船し、野生のシカと触れ合いながら、世界遺産厳島神社へと向かいました。神社の回廊では最近には特に外国人の訪問客が多いと感じられました。

その後自然解散とし島内を散策しながら宮島港に戻り、フェリーで宮島口、JR宮島口駅経由で帰路に着きました。会長には忙しい中、1日お付き合い頂き有難うございました。

なお、今年7月に広島県内を襲った豪雨災害の影響もあって、11回目の支部総会計画は少し遅れており、これから春にかけて役員会を開いた上で、具体的な内容を検討したいと考えています。



iGEM 2017 Giant Jamboree に挑戦

iGEM2017 神戸大学チーム代表 松井 沙樹 (応用動物学コース)

2017年11月に、アメリカのボストンで開催されたiGEM 2017 Giant Jamboreeという大会に神戸大学チームとして初めて参加しました。iGEMとは、マサチューセッツ工科大学で毎年11月ごろ開催される、学生によるものとしては世界最大規模の合成生物学の国際大会です。学生が主体となって数～数10人のチームを作り、主に細菌を用いた分子生物学の研究を行います。しばしば「生物版ロボコン」と例えられますが、実際にはBioBrickと呼ばれる遺伝子パーツを組み合わせ、大腸菌などの生物に組み込むことでこれまでにない機能を持たせることが目的です。メンバーは全員、学会での発表経験などはなく、さらに英語で発表するというので、発表資料の手直しや原稿内容のチェックのためにメンバーで何度も集まりました。幸い英語に堪能なメンバーがおり、顧問の先生方の協力も得られたことで、なんとか完成させることが出来ました。

4日間に及ぶ大会期間中、ボストン市内のMidtown Hotelに滞在しました。大会HPで紹介されているホテルのため、交流のあった他大学チームの人たちも宿泊していました。大会の会場であるHynes Convention Centerでは、Opening Ceremonyの華やかさと活気に驚くとともに、ここまで来られたことへの感動が込み上げました。他のチームの様々なテーマの発表を見聞して、

国際色の豊かな参加者の文化や考え方の違いに、改めて世界の広さを感じました。交流時間に拙いながらも英語でちゃんと話が出来たことは、わたしを英語に対する苦手意識から解放してくれました。私たちは一番参加者の多い学部生の部門で参加しましたが、高校生チームの研究に対する熱意とレベルの高さには驚かされました。

大会では事前に活動内容をまとめたチームwikiのほかに、スライドを用いた20分の口頭発表と、ポスター発表が審査対象となります。アウェーな環境に長旅の疲れ、さらにまだ11月とは思えない異常な寒さで疲れていましたが、発音や伝え方をホテルでも練習しイメージしていたおかげで緊張しながらも無事質疑応答することができ、銀賞を受賞することが出来ました。

学部時代に海外の大会にチームで参加することはそうできる経験ではないと思うので、このような経験をするにあたり援助いただいた六條会に感謝申し上げます。



国際植物学会議（中国・深圳）に参加して

生命機能科学専攻農環境生物学講座
昆虫多様性生態学教育研究分野

船本 大智

私は六籐会の援助のもと、中国・深圳で開催された国際植物学会議（International Botanical Congress、以下IBC）に2017年7月23日から29日まで参加し、ポスター発表を行った。IBCは6年に1度開催される。この大会では、植物学の幅広い分野における発表が行われ、特に植物の進化、分類・系統、生態に関連した研究発表が多い。私の専門である、植物と花粉媒介者の相互作用に関連した世界中の研究者が集まる会議であるため、参加することを決めた。IBCでは、国際植物命名規約を決める会議が前半の日程にあり、後半に一般講演の日程が配置されている。分類学が専門ではない私は時間とお金の都合で、後者のみに参加した。IBCは非常に大きな大会で、今回の参加者は約7,000人と試算されている。会場は非常に広く、会場の一角には『Flora of China』の現物やパンダの剥製が展示されていた。

ポスター発表は発表者が事前にポスターの電子ファイルを投稿し、IBC側がポスターの印刷と貼り付けを行う。つまり、ポスターを持っていく必要がないのは便利だった。もっとも、会場でポスターを確認するまでは、本当に会場にポスターが存在するのかが不安だった。ポスター発表の形式は、紙媒体と電子モニターに表示される電子

媒体の2通りの形式が存在したが、登録の際の私の不手際により私の発表は紙媒体のみだった。全体的にポスターを見ている参加者が少なく、残念ながら多くの参加者に発表することはできなかったが、有益な議論もできた。自身の発表以外では、いままで読んできた教科書や論文の著者の講演を聞いたり、彼らと会話したりすることは非常に刺激的だった。当たり前の事だが、彼らの発表や研究のレベルはとても高く、自身の研究の意欲が上がった。

発表以外では、現在滞在中の南アフリカの受け入れ研究室の教員と、滞在について話すこともできたのは有益だった。当時は滞在する助成金の申請中であったため、滞在前に彼と直接会話できたことは非常に良かった。また、学会が企画する小規模なエクスカージョンの一つに参加し、深圳近郊の仙湖植物園を訪れることができた。この植物園は広大で、特にソテツのコレクションには目を見張るものがあった。

旅費の補助をしていただいた六籐会にはお礼申し上げます。次回のIBCはブラジルのリオで開催されるので、次回も参加したい。

DIOXIN2017（カナダ）に参加して

生命機能科学専攻農環境生物学講座
環境物質科学教育研究分野

諏訪 瑞季
伊藤 輝志

私たちは2018年8月20日から25日までの6日間、カナダのバンクーバーで開催されたDIOXIN 2017という学会に参加しました。初めての学会発表に加え、大規模な国際学会ということで不安もありましたが、最先端の研究に触れられることへの期待を胸に学会に向けて準備を進めました。ダイオキシンなどの環境問題に関する学会であるためかペーパーレスの方針らしく、紙のポスターではなく一人一台与えられる大きなモニターにスライドを映しての発表でした。初めて見る形式に戸惑いましたが、指導教員である乾先生や先輩方のアドバイスを受け、伝わりやすく興味を引くポスターになるよう工夫しました。研究室内の発表練習会は散々な結果で、専門用語の発音や質疑応答の難しさを痛感しました。そこで発音に関しては、UPLB アグロサイエンス実用英語演習（フィリピン大学での短期英語学習プログラム）でお世話になったフィリピン大学の学生 Joanna をお願いして原稿を音読してもらい、その録音を聞きながら発音の練習を繰り返しました。質疑応答に関しては、質問を予想して補足資料を作成することで備えました。

発表当日は多くの人に聞きに来てほしいような、来てほ

しくないような複雑な気持ちでした。しかし始めてみると、聴衆との距離の近いポスター発表であったことや、聴衆が温かく聞いてくださったことが幸いし、話しやすい雰囲気の中で発表でき、内容を理解してもらえたようでした。質疑応答では一度で聞き取れないことも多々ありましたが、やりとりするなかでどうにか求められた返答をすることができました。自分の発表時間外には、いくつもの会場で平行して行われる発表の中から興味の引かれる発表を選んで聞きにいきました。近い分野の研究でも実験手法や着眼点など異なる点が多くあり、とても勉強になりました。特にポスター発表では聞いた後に質問やコメントを求められるので、拙い英語な上に中身の無い質問…と思いつつも質問しました。そうすると丁寧に説明してもらえ、まずは気後れせずに聞いてみるのが大事だと感じました。

学会後の週末には、ギャスタウンやグランビルアイランド、キャピラノ吊り橋に出かけ、バンクーバーの街並みや大自然をしっかりと観光しました。

最後になりましたが、国際学会での発表という大変貴重な経験をするにあたり、援助いただいた六籐会に心より感謝申し上げます。

食料共生システム学専攻生産環境工学講座
土地環境学教育研究分野

教授 河端 俊典
准教授 澤田 豊 (神AE35回、博前32回、博後H19)

土地環境学教育研究分野は、故尾崎叡司先生が1980年に開設された土地利用工学講座から始まり、前教授の内田一徳先生（現神戸大学理事・副学長）が引き継がれ、1997年に土地環境学に名称が変更されました。現在は、河端ならびに澤田の2名で運営しています。当分野では、農業に欠かせない水を運ぶためのパイプラインや貯水するためのダムやため池をはじめとする各種農業水利施設を対象に、合理的な設計施工方法の確立や耐震性向上および災害防止を目指して研究を行っています。研究手法としては、現場条件を考慮した模型実験や数値解析を基本としていますが、実際の構造物の挙動や施工方法を検証するため、実大規模実験や現場実証試験を行うこともあります。現在遂行中の主な研究テーマは以下の通りです。

- ・パイプライン屈曲部の耐震性向上に関する研究
- ・矢板施工で埋設したパイプラインの力学挙動に関する研究
- ・ポリエチレン管の力学挙動に関する研究
- ・遮水シートを用いたため池堤体の動的挙動に関する研究
- ・プレキャストコンクリート製底樋の力学挙動に関する研究
- ・津波による堤防背後地盤の洗掘に関する研究
- ・波浪による海岸施設の吸い出し現象に関する研究
- ・衝撃弾性波によるトンネル背面空洞探査に関する研究



パイプラインの現場埋設実験（農林水産省）

研究課題の多くは、農研機構（農村工学研究部門）コロンビア大学など他の研究機関や大学ならびに農林水産省や民間企業との共同研究として行われ、大型振動台や遠心力模型実験装置など大規模な施設を利用して実施されることもあります。

在籍中の学生は、博士後期課程2名、博士前期課程2年生3名、同1年生4名、学部4年生3名、学部3年生4名の合計16名となっています。ほとんどの4年生は、博士前期課程に進学します。進路としては、大学教員や国の研究機関などの研究者、農林水産省、国土交通省な

どの国家公務員ならびに兵庫県、大阪府などの全国自治体の農業土木職および民間企業の土木職に就職し、活躍しています。



実大規模のため池堤体振動実験（E-ディフェンス）

当研究室では、3年生後期の研究室配属にともない研究活動を開始し、3年生の3月にはそれらの成果を論文にまとめ、4年次の夏に開催される農業農村工学会や地盤工学会にて、学会発表を行うことを基本としています。また、大学院生は、研究をさらに発展させ、米国土木学会をはじめとする国際会議で発表することも多いです。

研究室ゼミは、週2回開催され、各自の研究報告・ディスカッションならびに外書輪講を行っています。通常のゼミに加え、他大学との交流を深める目的で、大阪府立大学土環境学研究室との合同ゼミを年3回（4月、8月、12月）実施していますが、今年の12月で第45回目の開催を迎えます。

最近の研究成果や構成メンバーについては当分野のホームページ (<http://www.research.kobe-u.ac.jp/ans-soilenv/>) をご覧下さい。卒業生の皆様、お近くにお越しの際はお気軽にお立ち寄り下さい。研究室一同、皆様のご来室を心よりお待ちしております。



2018年度研究室メンバー（2018年10月撮影）

研究室紹介Ⅱ

資源生命科学専攻応用植物学講座
熱帯有用植物学教育研究分野

教授 東 哲司 (神A17回、修15回、博後H3)
准教授 深山 浩 (神A24回、修22回、博後H10)

熱帯有用植物学教育研究分野は、旧栽培学研究室を母体として1973年に熱帯有用植物学研究室として誕生しました。当初は園芸農学科に属していましたが、1993年の学部改組による大講座制の導入により、生物環境制御学科植物機能制御学大講座に属することになり、熱帯植物学教育研究分野に名称を変更しました。さらに、2007年の農学研究科の設立に伴う改組により、資源生命科学専攻応用植物学講座に移り、名称を熱帯有用植物学教育研究分野に再度変更しました。設立から現在までの45年間に、241名の学部卒業生、127名の修士課程修了者、15名の博士課程修了者を送り出しています。卒業後、企業や国の研究機関で行った研究での学位取得者を含めると、当研究室は22名の博士学位取得者を社会に輩出したことになります。

設立当初のスタッフは、佐藤 孝先生(名誉教授・故人)と山口 禎先生(名誉教授・兵A1回)の2名で、1980年に安田武司先生(名誉教授)、1981年に内田直次先生(故人)が加わり、1991年に東 哲司(神A17回)が加わりました。1998年に内田先生が植物資源学科に移られ、1999年に生物機能制御学科から南森隆司先生(名誉教授・神C6回)を迎え入れ、その後、南森先生は2005年にバイオシグナル総合研究センターに移られました。2006年に国際農林水産業センターから伊藤一幸先生(神A4回・作物学出身)が教授として赴任されました。その後、2013年に笹山大輔先生(神BE34回)が特命助教として加わり、2015年に伊藤先生が定年退職され、その年に深山 浩(神A24回)が資源植物生産学教育研究分野から准教授として加わりました。2017年に笹山先生は資源植物生産学研究分野に移られ、現在、東と深山の2人の教員で研究室を運営しています。現在、学生は大学院博士前期課程(修士課程)8名(内留学生1名)、学部4年生3名、学部3年生4名の合計で15名が在籍しています。

私どもの研究分野では設立以来、熱帯のイネやマメ類、コーヒー、サトウキビ、キャッサバ、サゴヤシ、カカオ、ステビア、ロゼル、アカシアマンギウム、エリオットマツ、マングローブ等の熱帯植物を材料に研究を進めてまいりました。これまで、これらの植物の栽培方法や形態などの研究から、物質生産や光合成能力の調査、組織培養による大量増殖と再分化機構の解明、熱帯環境への適応メカニズムの解明、有害雑草の防除等の研究を進めてまいりました。以下に、現スタッフの研究テーマについて述べます。

東は、洪水環境でのイネの適応について研究しています。近年、地球温暖化の影響により洪水が増加傾向にあり、その被害は熱帯地域に集中しています。イネの洪水に対する適応は、幼植物体が水没状態に遭遇すると成長を停止し洪水後に成長を再開する反応である冠水耐性と、成熟植物体が数ヶ月にわたる長期的な洪水による水位上昇に伴い節間を伸長させることで水没を回避し生育を続ける反応である浮稲性の二つが知られています。しかしながら、これら二つの洪水適応形質を併せ持つ栽培イネ品種は見つかっていません。最近我々は、アフリカや南米に自生する野生イネのなかにこの両形質を持つ系統を発見しました。これらの植物の反応と関与する遺伝子を解明し、浮稲性と冠水耐性を合わせ持つ栽培イネ品種の育成を目指しています。

深山は、高CO₂や高温といった近未来環境に適応した作物の開発を目指した研究を行っています。C4植物の触媒速度の高いRubiscoを利用した光合成能力の改良、CAM植物の高温耐性Rubisco activaseを利用した高温耐性の改良、高CO₂応答の分子メカニズムの解明、茎葉のデンプン合成制御メカニズムの解明などの研究テーマを学生と議論しながら進めています。

2016年の8月に大学キャンパス内で同窓会を開催いたしました(下写真)。山口先生、安田先生、伊藤先生、南森先生がお見えになり、卒業生とその家族、在学生を含めて107名が集まりました。その時の様子を研究室のホームページに載せておりますので、興味のある方は御覧ください(パスワードは熱帯で有名なイモの名前です)。数年後に、このような会をまた持ちたいと思いますので、前回連絡が届かなかった同窓生の方は、連絡先を東(azuma@kobe-u.ac.jp)か深山(fukayama@people.kobe-u.ac.jp)までお知らせいただければと思います。



六篠賞

六篠社会貢献賞

「夢」と「生活」のバランス

国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター
研究員 **前野 浩太郎** (博後H20昆虫機能学)

この度、栄えある六篠社会貢献賞を賜り誠に光栄に存じます。今回の受賞に際しまして、推薦して下さった竹田真木生先生、また、ご検討いただきました六篠会の関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

今回の受賞は、光文社から出版した『バッタを倒しにアフリカへ』（光文社新書）を評価していただいたものです。本書は、2017年度に出版された1600冊以上の全ての新書の中から選ばれる「新書大賞2018」や「毎日出版文化賞・特別賞」などを受賞し、累計部数は20万部に達しました。表紙からわかるように、研究者にはあるまじき、姑息な技を使って販売促進しました。その内容は、バッタを退治するためにアフリカへ赴いた体験記で、ほとんどの人には縁もゆかりもない話です。それにもかかわらず、多くの方々に手に取っていただけているのは、本書が、全ての人々が直面する「夢」と「生活」を天びんにかけてどう人生を進めるかを軸に据えたからだと考えています。

私の夢は、昆虫学者になること。サバクトビバッタに関する生理・生態学的な研究により神戸大学で学位を取得しました。当然、バッタの研究を続けて生活したかったわけですが、そうは簡単にいきません。日本ではバッタによる被害はほとんどなく、研究の需要は皆無。バッタの研究をしながら給料をもらい続けるポストなど準備されておりません。優秀な研究者なら、優れた業績を片手に実力で大学や研究所のポストを得られるでしょうが、あいにくそのような能力も備えておりません。

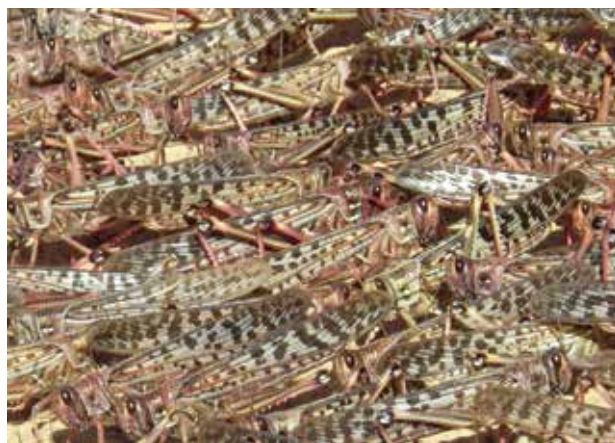
いっそのことバッタ問題で困っている本場に行ってしまうえば、先に繋がるのではという甘い魂胆で任期2年間の海外学振の制度を利用して西アフリカのモーリタニアに単身出向き、国立バッタ防除センターに受け入れてもらいました。現地では専門の防除機関が整備されているほどバッタは深刻な問題です。一度大発生すると、地球上の陸地面積の約2割に被害が及び、世界人口の約1割の方々が食料問題に瀕すると言われており、地球規模の課題として取り扱われています。

威勢よくアフリカに渡ったものの、2年間で大きな成果をあげられず、次のポストも見つからないまま無収入に陥りました。夢を追いかけた代償は、酷いものでした。日本に帰り、別の研究テーマでもいいのでポストクとして誰かに雇ってもらおうという選択肢もありましたが、それではアフリカでバッタが大発生したときにすぐに駆けつけることが出来ません。貯金と相談したところ一年間だけなら食いつなげそう。そこで無収入の身でアフリカに残ることにしました。その間、王道でなくてもいいから、なんとか研究を続ける道は残されていないか模索しました。実力不足ならば、研究の世界に残れないのは当然です。しかし、無様な姿



でもいいのでなんとかしがみつきたい。そもそも、アフリカのバッタ問題は日本では知名度が低く、重要視されていない。日本でもバッタ研究の重要性が認知されれば、ポストを得やすくなるのではと閃きました。そこから、バッタ問題の知名度をあげるためにネットを使った広報活動に手を染めました。ご存知のように研究者が研究以外のことで売名行為をしていると不真面目の烙印を押され、学会で肩身が狭くなります。後ろめたさを常に感じながらネットを駆使し、自らピエロになって面白おかしいことを叫び、人々の関心を集めました。それが効いたかどうかは不明ですが、翌年、京都大学白眉センターに特任助教として採用され、その後、異動先の現在の職場でもバッタの研究を続けることができています。

夢を追うのは代償が伴うので心臓に悪いですが、やりたいことをしながら生活できることはこの上ない贅沢だと思います。応援して下さる皆様に感謝の気持ちを忘れずに、今後も精進していく所存です。一人でも多くの人々が「夢」を叶えられる社会になることを心から願っています。



六篠学術奨励賞

六篠学術奨励賞を受賞して

資源生命科学専攻応用植物学講座
園芸植物繁殖学教育研究分野

宮路 直実

この度は名誉ある六篠学術奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。このような身に余る光栄は、私一人の力では決して得られなかったと考えております。この受賞にあたり、修士学位論文研究をご指導いただきました園芸植物繁殖学研究室の藤本龍准教授ならびに安田(高崎)剛志教授、植物病理学研究室の土佐幸雄教授ならびに中馬いづみ助教(現帯広畜産大学准教授)に厚く感謝申し上げます。また、これまでの生活を支えてくださいました皆様に深くお礼申し上げます。

私は現在、ハクサイやコマツナなどのアブラナ科野菜の持つ病害抵抗性遺伝子を単離することを目的に実験を進めております。近年、環境変動や異常気象により様々な病害が問題となりつつあります。これらの病害に感染しても病害抵抗性品種は発病しないため、野菜や作物の安定生産を支えることができます。病害抵

抗性遺伝子を単離することで、病害抵抗性品種の育種の効率化に貢献できると考えております。本研究を進めることができたのは多くの方々のご協力があったこそだと思っております。病害に関する実験では不可欠である病原菌の接種実験には、植物病理学研究室の皆様にご指導、ご尽力いただきました。また、データ解析や材料育成では学外機関の方々にもお力添えいただきました。私は本研究を進める中で、人と人の繋がりの重要性を再認識いたしました。一人で解決するには困難な課題でも、専門分野の異なる皆様のお力添えにより解決への道を切り開くことができることを知りました。今後は六篠学術奨励賞受賞の名に恥じないよう、人との繋がりを大切に、より一層精進いたします。皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

六篠学生賞

六篠学生賞を受賞して

食料環境システム学科
食料環境経済学コース

吉崎 日菜子

この度は名誉ある六篠学生賞を賜りましたことをとても光栄に思います。この4年間一度も欠席せず講義に参加し意欲的に勉学に取り組むことができたのも食料環境経済学コースの先生方のご指導や同コースに共に所属していた大切な仲間たちのおかげであり、心から感謝しています。

私の大学生活の4年間を振り返ると、思い出せるのは食料環境経済学コースで過ごしたかけがえのない思い出ばかりです。1学年12人と他コースと比較すると少人数ではありますが、その分1人ひとりが個性的で4年間一緒にいても一度たりとも飽きることはありませんでした。最後の1年は講義を受講している人も少なく、なかなか顔を合わせることができない仲間もいましたが、それでも学生部屋に行くと必ず誰かがいて、卒業論文を作成しながら彼らと談笑することは良い息抜きになりました。卒業論文の中間発表前に皆で必死にパソコンに向かったのも今となっては良い思い出です。半数以上の仲間が就職という道を選び、卒業式以来なかなか全員揃うことはできていませんが、それぞれが選んだ道の先でそれぞれが活躍していることは私にとって励みになっています。

小さい頃から途上国支援に関心があった私にとってこの

コースで学んだことは有意義なものでした。特に貧困研究を主として行っている石田先生の下で学ぶことができたことは得るものも多く、とても良い勉強になりました。また講義の中で海外のみならず国内の農村地域に向きそこで生活している人々や地域おこし協力隊の方々と関わることで、漠然としていた自分の関心事をより具体化することができました。

農学部での4年間を通して感じた「もっと深く開発学について学びたい」という思いから、現在は神戸大学大学院国際協力研究科に所属し、この9月から同研究科のダブルディグリープログラムを利用して英国のイーストアングリア大学にて農業・農村開発について学んでいます。途上国での活動経験がある学生がほとんどで経験値の差に圧倒されることもありますが、農学部で学んだ知識や過ごした日々を胸に日々精進しています。

最後になりましたが、今私のがびのがびと勉学に励むことができていたのも素晴らしい学習環境が整っていた神戸大学農学部で学ぶことができたおかげです。本当にありがとうございました。

神戸大学 キャンパスシニアジム(コグニケア)

認知症を学び、予防を目指そう

コグニケア

- ・6ヶ月20回コース(年間40回コース)
- ・開講日:2019年4月・10月
第一期は2018年11月に開講中
- ・参加対象者:60歳以上の本学卒業生・ご家族様

コグニケア(Cogni CARE)とは、認知症予防を必要とされる60歳以上の方に、運動や認知トレーニングなど多面的に予防にいいものに、取り組むプログラムの総称です。神戸大学の研究者達が、最先端の研究を基盤に考案しました。

コグニケアってなに？

週1回、60分の実践トレーニングの場に集まっていただき、脳と運動のトレーニング、特に二重課題の運動を実践活動認知症に係る話題の意見交換を中心に、1年間の活動を続けます。また、1年に1回認知機能の測定と、認知症に係る身体・血液検査を行っていきます。

【推薦の言葉】神戸大学は、培ってきた研究成果を日本全国に向けて発信していきます。「認知症予防プロジェクト」はその一つです。しかも、今回のお誘いは、同窓生ご自身の健康増進のみならず、皆様のご参加が、新たに進化した「認知症予防プロジェクト」の開発につながります。懐かしい学び舎に戻って、新しい神戸大学で、同窓生の集いとしても、人生を楽しみましょう。皆様のご参加をお待ちします。

神戸大学学友会会長 原 俊雄

【説明会及び無料体験会】

・研究員による無料事前説明会や約1時間の無料体験会を今後予定していきます。ご質問やご相談もしていただくことができますので、ぜひお越しください。大学のHP等を通じて、案内します。

【第二期開講予定】2019年4月・10月 *各クラス 定員15名 *開催日:水曜日(午後)

【受講料】6ヶ月で27,000円(4,500円/月)、1ヶ月単位の支払いは5,616円と割高
・認知症検査は、1年に1度実施し、実費2,000円(税込2,160円)です。

【問い合わせ先】:email:padinfo@org.kobe-u.ac.jp

神戸大学保健学研究科 総務係:078-796-4502(月~金:9~17時)

神戸大学農学部教育研究振興基金への ご支援のお礼と現状報告について



六條会と農学部・農学研究科では2016年から農学部・農学研究科の教育研究の振興を目的として、「神戸大学農学部教育研究振興基金」を設立し、募集期間は2016年10月1日から2019年3月31日、目標金額を1億円として卒業生の方々や現役および退職教職員の方々にご支援をお願いしてきました。しかしながら、関係者の皆様への周知不足から現在まで下記の金額しか集まっておりません。このため募集期間を3年間延長して皆様のご支援をお願いすることといたしました。(2022年3月31日まで)

本基金は、今後の人材育成と研究成果創出のための基盤づくりに活用させていただく予定です。引き続き神戸大学農学部・農学研究科の発展のため一層のご支援ご協力賜りますようお願い申し上げます。

2018年12月10日現在

卒業生	116名	2,450,000円
退職教員	13名	430,000円
教職員	27名	2,743,000円
計	156名	5,623,000円

平成30年度代議員総会報告

2018年7月21日六甲苑において代議員総会を開催し、役員・代議員37人の出席のもと加納健三代議員（兵C16回）を議長に選出し、

- ①2017年度六篠会事業報告並びに収支決算について
- ②2018年度六篠会事業計画並びに収支予算について
- ③役員の変更について

について審議いただき全議案が承認されました。



平成29年度庶務報告

2017年度の一般事業として入学者記念品贈呈、会費納入促進、会報発行、各支部活動・学友会・KUC援助、農学部援助、手提げ袋贈呈、卒業祝賀会援助、慶弔関連などを行いました。また、学術振興事業として生命機能科学専攻主催の学術講演3件、資源生命科学専攻主催の学術講演1件、大学院生の海外学術活動5件に対して援助

を行い、優秀な業績を残した教員および学生に六篠賞の授与を行いました。2018年度についても例年同様、一般事業および学術振興事業を維持していくことが代議員総会で承認されましたので、それに基づき現在活動しているところです。

■役員

会長(学友会副会長兼幹事)中村 直彦 (神Z 1回)	理事(ホームカミングデイ)西尾 司 (兵Z 16回)
副会長(ホームカミングデイ)辻 莊一 (兵Z 12回)	理事(会報) 松山 稔 (神P 14回)
副会長(学友会常任幹事) 松井 功 (兵T 16回)	理事(名簿) 宮島 康彦 (神P 23回)
副会長(KUC・学友会編集委員)石賀 暢一 (神C 1回)	理事(庶務/名簿) 鈴木 武志 (神C 23回)
副会長(学友会幹事/会報委員長)武 正興 (神C 3回)	理事(会計) 笹崎 晋史 (神AS31回)
副会長(会報/県六篠会長) 片山喜久男 (神A 14回)	監事 永吉 照人 (兵A 13回)
副会長(会報/KoBE六篠会長)安原 潤 (神A 15回)	監事 南森 隆司 (神C 6回)
理事(代表) 原山 洋 (神Z 18回)	顧問 西川 欣一 (兵A 1回)
理事(会報) 大西 成己 (鶴 3回)	顧問 田中 平義 (兵C 1回)
理事(KUC) 王子 善清 (兵C 12回)	顧問 能宗 康夫 (兵C 2回)
理事(KUC) 坂井 永利 (兵A 12回)	顧問 新家 龍 (兵C 5回)
理事(名簿) 吉倉惇一郎 (兵C 16回)	顧問 北浦 義久 (兵A 6回)

■代議員

前田 泰秀 (兵C 8回)	兼崎 雅弘 (神T 21回)
酒井 修 (兵A 9回)	八木 剛 (神P 22回)
番匠 宏行 (兵Z 13回) 広島県支部長	乾 秀之 (神P 25回)
置塩 康之 (兵A 14回)	井上健一郎 (神C 25回)
加納 健三 (兵C 16回) 関東支部長	川端 忠則 (神A 26回)
長谷川信弘 (兵C 16回) 東海支部長	河野 健児 (神Z 27回)
花本 秀生 (兵C 16回)	岡田 嘉夫 (神T 29回)
阪上 昭宏 (鶴 3回)	福田伊津子 (神BC31回)
財田 福雄 (鶴 5回)	鳥居 明英 (神BE33回)
長谷川明彦 (神C 1回)	棕本久美子 (神PR34回)
得丸 哲士 (神Z 2回)	小田 哲也 (神AE37回)
松本 幹夫 (神A 3回)	中辻 優香 (神AE37回)
矢代 学 (神P 10回)	岩出 郁美 (神AE39回)
山田 健次 (神Z 12回)	宇野 雄一 (博後H 8)
門岡 織江 (神P 17回)	橋本 堂史 (博後H 14)
松永 将義 (神C 17回)	

●2017年度事業報告 一般事業

項目	時期	内容	項目	時期	内容
入学者記念品贈呈 1) ログ入り USBメモリー 2) 六十周年記念 DVD 3) 六篠会報 No.31	4月	入学者318名 (学部：162名、編入：9名、修士：126名、 【内、学外27名】、博士：14名【内、学外3名】)	活動 援助 学友会 KUC		幹事会、常任幹事会等 運営委員会、幹事会等
	10月	入学者9名 (修士：2名【学外】、 博士：7名【学外学内他学部1名】)			
		入会者 158名 (学部：139名、編入：7名、修士：11名、 博士：0名、既入学者：1名)			
支 部 総 会 東海 広島県	7月	支部総会 7月2日 (中村会長、河端研究科長出席)	六甲祭援助	11月	11月11日・12日開催
	10月	支部総会 10月6日 (中村会長、河端研究科長出席)	農学研究科支援	12月	施設使用料及び運営費 英語プログラム、海外学生招聘
	11月	支部総会 11月17日 (中村会長、河端研究科長出席)	会報発行	12月	8,300部 (7,810部発送)
	2月	支部総会 2月24日 (中村会長出席)	六甲山マラソン大会	12月	12月17日開催
			卒業式手揚げ袋贈呈	3月	卒業生 164名
			卒業記念パーティー援助	3月	修了生 130名 (内3名は9月修了)

学術振興事業関連

●学術講演会援助

専攻・教育研究分野	開催日	講演題目	参加数
生命機能科学専攻 農環境生物学講座	2017/05/01	トウモロコシ黒穂病菌の病原性エフェクターとその進化 (ドイツ マックスプランク陸生微生物学研究所 田中茂幸)	19名
資源生命科学専攻 応用植物学講座	2017/06/02	Hybrid mimics, a new strategy for increased food production (CSIRO, オーストラリア Dr. Elizabeth S. Dennis)	33名
生命機能科学専攻 応用生命化学講座	2017/08/31	Function of Diacylglycerol Kinase in immune system (スペイン科学最高会議 Dr. Isabel Merida)	30名
生命機能科学専攻 応用生命化学講座	2018/03/30	(-)-Epicatechin and the gastrointestinal tract: local and systemic effects (University of California, Davis, CA, USA Patricia I. Oteiza) Flavonoids in human health: relevance and bioactivity as regulators of redox signaling (University of Buenos Aires, Buenos Aires, Argentina Cesar G. Fraga) Factors affecting bioavailability of quercetin-related flavonoids (Konan Women's University, Kobe, Japan Junji Terao)	35名

●海外学術活動援助

富田 典希	応用植物学講座・資源植物生産学教育研究分野 The 7th Asian Symposium on Plant Lipid 2017 台湾・台北、2017.11.29~2017.12.2
岡田 萌子	農環境生物学・植物遺伝学教育研究分野 the 13th International Wheat Genetics Symposium Austria・Tulln、2017.4.23~2017.4.28
船本 大智	農環境生物学・昆虫多様性生態学教育研究分野 International Botanical Congress China・Shenzen、2017.7.23~2017.7.29
伊藤 輝志	農環境生物学・環境物質科学教育研究分野 DIOXIN 2017 Canada・Vancouver、2017.8.20~2017.8.25
諏訪 瑞季	農環境生物学・環境物質科学教育研究分野 DIOXIN 2017 Canada・Vancouver、2017.8.20~2017.8.25

●六條国際賞

土佐 幸雄	生命機能科学専攻農環境生物学講座植物病理学教育研究分野 Evolution of the wheat blast fungus through functional losses in a host specificity determinant Science (IF2017=37.205) 357(6346), 80-83 (July 2017) Inoue Y, Vy TTP, Yoshida K, Asano H, Mitsuka C, Asuke S, Anh VL, Cumagun CJR, Chuma I, Terauchi R, Kato K, Mitchell T, Valent B, Farman M, Tosa Y
-------	---

●六條論文賞

木村 行宏	生命機能科学専攻応用生命化学講座微生物資源化学教育研究分野 Probing structure-function relationships in early events in photosynthesis using a chimeric photocomplex. PNAS (IF2017=9.661) 114(41) 10906-10911 (October 2017), Nagashima KVP, Sasaki M, Hashimoto K, Takaichi S, Nagashima S, Yug L-J, Abe Y, Gotou K, Kawakami T, Takenouchi M, Shibuya Y, Yamaguchi A, Ohno T, Sheng J-R, Inoue K, Madigan MT, Kimura Y, and Wang-Otomo Z-Y
-------	--

●六條社会貢献賞

前野浩太郎	国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター研究員 第71回毎日出版文化賞・特別賞 第14回絲山賞 さわべス新書大賞2018 新書大賞2018(中央公論新社) 『バッタを倒しにアフリカへ』(光文社新書)2017年5月17日発刊
-------	--

●六條学術奨励賞及び六條学生賞

学術奨励賞(8名、内博士2名、修士6名)

岡田 聡史	資源生命科学専攻応用植物学講座博士課程
嶋川 銀河	生命機能科学専攻農環境生物学講座博士課程
小尾 泰輝	生産環境工学講座
山下 遥	食料環境経済学講座

米田 直起	応用動物学講座
宮路 直実	応用植物学講座
池田 真規	応用生命化学講座
岡田 萌子	農環境生物学講座

学 生 賞 (6名)

栗谷 友樹	生産環境工学コース
吉崎日菜子	食料環境経済学コース
久保 静花	応用動物学コース

西田菜美子	応用植物学コース
堂前 千晶	応用生命化学コース
高橋仁志華	環境生物学コース

●慶弔関連

(順不同・敬称略)

以下の方々をご逝去なされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

関山 太 (兵 A 17 回)	西口 實美 (兵 C 3 回)
新谷 芳粋 (兵 A 14 回)	酒井 富久美 (兵 C 9 回)
浦岡 睦 (兵 A 7 回)	秋末 宏幸 (兵 A 6 回)
山村 健一郎 (神C25回・博前23回)	山田 孝義 (兵 A 10 回)
金田 成雄 (兵 A 9 回)	早川 紀代秀 (神 A 4 回)
藤井 直文 (鶴 4 回)	福田 喜一 (兵 C 2 回)
星野 顕彰 (兵 P 16 回)	柳谷 博昭 (神BC31回・博前29回)
本多 宏州 (鶴 4 回)	内田 邦夫 (兵 C 15 回)
樽味 宏 (兵 C 7 回)	三浦 樹紀 (兵 C 6 回)
吉田 千秋 (兵 C 13 回)	日比 伸子 (神P19回・修17回)
新木 正昭 (兵 A 14 回)	宇治田 勇次 (兵 C 16 回)
隅田 啓介 (兵 Z 14 回)	切實 武代司 (鶴1・旧教官)
新納 功一 (兵 C 14 回)	寺井 弘文 (神A2・旧教官)
前川(森田)一恵 (神 T 14 回)	新家 龍 (兵C5・旧教官)

●退職及び着任教員

(敬称略)

退職および着任された先生方をお知らせします。

●退職された先生

豊田 淨彦	教授	(H30.3.31)
北川 浩	教授	(H30.3.31)
滝川 浩郷	教授	(H30.3.31)
高木 大輔	特命助教	(H30.3.31)
中馬 いづみ	助教	(H30.3.31)
堀田 佳那	特命助教	(H29.12.31)

●着任された先生

鈴木 麻里子	特命助教	(H.30.1.1)
吉田 弦	特命助教	(H.30.1.1)

平成29年度収支決算

平成29年度一般会計決算

収入	6,472,484円
支出	6,228,944円
残高	243,540円

■収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
入会金	7,000,000	6,320,000	-680,000	40,000円×(158名)
雑収入	1,000	24	-976	普通預金口座利息
前年度からの繰越金	152,460	152,460	0	
合計	7,153,460	6,472,484	-680,976	

■支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
農学部援助金				
一般援助費	550,000	550,000	0	構内整備等
国際化援助費	500,000	500,000	0	英語プログラム、海外学生の招聘
一般事業費				
会報発行費	1,600,000	1,706,313	106,313	8300部
各種活動援助費	500,000	520,000	20,000	支部活動、学生活動支援
入学記念祝賀費	250,000	347,000	97,000	USBメモリ200個
卒業記念祝賀費	450,000	300,000	-150,000	祝賀会援助
卒業生名簿等管理費	60,000	54,003	-5,997	
代議員総会経費	250,000	191,268	-58,732	
一般事務費	1,000,000	744,888	-255,112	事務アルバイト代、郵送料等
会議費	60,000	15,122	-44,878	理事会費(3回)
慶弔費	250,000	60,540	-189,460	退職教員記念品
褒賞費	50,000	20,000	-30,000	功労者表彰等
役員活動費	600,000	609,810	9,810	
神戸大学学友会費	120,000	110,000	-10,000	年会費等
繰り出し金	500,000	500,000	0	六條会基金へ繰り出し
予備費	413,460	0	-413,460	
支出合計	7,153,460	6,228,944	-924,516	
次年度への繰越金	0	243,540	243,540	
合計	7,153,460	6,472,484	-680,976	

平成29年度六條会基金決算

収入	44,892,454円
支出	997,202円
残高	43,895,252円

■収入の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
前年度からの繰越金	44,389,102	44,389,102	0	
繰入金	500,000	500,000	0	
雑収入	10,000	3,352	-6,648	預金口座利息
合計	44,899,102	44,892,454	-6,648	

■支出の部

項目	予算額(円)	決算額(円)	増減(-:減)	備考
学術活動援助費	300,000	80,000	-220,000	20000円×4件
六條賞	600,000	531,770	-68,230	学部5件、専士6件、博士2件、顕員4件他
海外学術活動援助費	500,000	385,000	-115,000	5件
一般事務費	1,000	432	-568	銀行引き出し手数料
予備費	100,000	0	-100,000	
支出計	1,501,000	997,202	-503,798	
保留金	43,398,102	43,895,252	497,150	
合計	44,899,102	44,892,454	-6,648	

平成30年度収支予算

平成30年度一般会計予算

■収入の部

項目	30年度予算(円)	29年度予算(円)	増減(-:減)	備考
入会金	7,000,000	7,000,000	0	40,000円×約180名
雑収入	1,000	1,000	0	普通預金口座利息
前年度からの繰越金	243,540	152,460	91,080	
合計	7,244,540	7,153,460	91,080	

■支出の部

項目	30年度予算(円)	29年度予算(円)	増減(-:減)	備考
農学部援助費				
一般援助費	550,000	550,000	0	構内整備等
国際化援助費	500,000	500,000	0	英語プログラム、海外学生の招聘
一般事業費				
会報発行費	1,650,000	1,600,000	50,000	年一回(約8500部)
各種活動援助費	500,000	500,000	0	支部活動・学生活動支援
入学記念品費	500,000	250,000	250,000	USBメモリなど
卒業記念祝賀費	450,000	450,000	0	祝賀会援助
卒業生名簿等管理費	30,000	60,000	-30,000	名簿修正費
代議員総会経費	250,000	250,000	0	
一般事務費	1,000,000	1,000,000	0	事務アルバイト代、郵送料等
会議費	60,000	60,000	0	学内理事会費
慶弔費	250,000	250,000	0	定年退職教員への記念品、電報
褒賞費	50,000	50,000	0	功労者表彰
役員活動費	600,000	600,000	0	学友会・KUC活動費など
神戸大学学友会費	110,000	120,000	-10,000	年会費等
繰り出し金	500,000	500,000	0	六條会基金への繰り出し
予備費	244,540	413,460	-168,920	収入合計と支出の差額
合計	7,244,540	7,153,460	91,080	

平成30年度六條会基金予算

■収入の部

項目	30年度予算(円)	29年度予算(円)	増減(-:減)	備考
前年度からの繰越金	43,895,252	44,389,102	-493,850	
繰入金	500,000	500,000	0	一般会計からの繰り入れ
雑収入	5,000	10,000	-5,000	大口定期・普通預金利息
合計	44,400,252	44,899,102	-498,850	

■支出の部

項目	30年度予算(円)	29年度予算(円)	増減(-:減)	備考
学術活動援助費	300,000	300,000	0	
六條賞	600,000	600,000	0	
海外学術活動援助費	500,000	500,000	0	
一般事務費	1,000	1,000	0	
予備費	100,000	100,000	0	
支出計	1,501,000	1,501,000	0	
保留金	42,899,252	43,398,102	-498,850	
合計	44,400,252	44,899,102	-498,850	

同窓会事務局の案内

会員の皆様からの本会へのご連絡をFAX、e-mailで受付けております。
住所や連絡先の変更、また本会に対するご要望、ご意見などおまちしております。
なおご連絡の際には、所属学科、卒業年次を併せてお伝え頂こうお願い申し上げます。

- FAX:078-881-2752
- e-mail:rikusoukai@yahoo.co.jp
- ホームページ
<http://home.kobe-u.com/rikusou/>



神戸大学大学院農学研究科・農学部
＜卒業生の方へ＞
<http://www.ans.kobe-u.ac.jp/aotugyousei/top.html>
も是非ご覧ください。



臨時代議員総会報告

2019年に神戸大学農学部創立70周年記念事業を実施することとし、下記のとおり基金を取り崩し、創立70周年記念事業会計特別予算を計上するため、2018年12月15日六甲苑において、役員・代議員27名の出席のもと臨時代議員総会を開催し、下記の事業計画及び予算について承認された。事業計画は、裏表紙「神戸大学農学部創立七十周年記念行事のお知らせ」をご覧ください。なお、これに伴う補正予算は次のとおりです。

2018年度六篠会基金の変更

■支出の部

項目	30年度予算(円)	29年度予算(円)	備考
学術活動援助金	300,000	300,000	
六篠賞	600,000	600,000	
海外渡航援助費	500,000	500,000	
一般事務費	1,000	1,000	
予備費	100,000	100,000	
70周年記念事業費	14,520,000		LED他
支出計	16,021,000	1,501,000	
保留金	28,379,252	42,899,252	
合計	44,400,252	44,400,252	

創立70周年記念事業会計特別予算

■収入の部

項目	予算額	備考
参加費	3,050,000	篠山記念 150人 神大農記念 250人
募金	3,250,000	個人 10,000円×250人 企業 30,000円×25社
小計	6,300,000	
六篠会基金	14,520,000	
合計	20,820,000	

■支出の部

項目	予算額	備考
神大農記念事業		
記念講演講師謝礼	200,000	
農学部への設備・備品の寄贈	10,000,000	LED照明、食資源センター看板
記念誌製作(DVD)	1,500,000	2,500部
創立70周年記念特別会報	1,000,000	
記念品製作	500,000	500個
祝賀会	1,250,000	
小計	14,450,000	
事務費		
広報印刷物の作成	500,000	
事務費	1,000,000	通信費等、HP刷新費
会議費	600,000	
委員の交通費	500,000	
委員の日当	500,000	
小計	3,100,000	
合計	20,820,000	

■支出の部

項目	予算額	備考
篠山記念事業		
建学記念碑の改修	1,200,000	
バスチャーター費	400,000	3.4台三宮⇄六甲⇄篠山
農大校舎・跡地見学	20,000	見学お礼
農業サークル交流事業	400,000	感謝状、記念品、関係者、学生招待約50人
農学部・篠山市との交流事業	200,000	
祝賀会	1,050,000	
小計	3,270,000	

お知らせ

「六篠会の個人情報に関する基本方針」を2017年12月8日に制定しました。詳しくは、六篠会のホームページをご覧ください。



編集後記

六篠会報を毎年お正月にお届けしていますが、今回は一月末の発刊となりました。今年度は神戸大学農学部が創立七十周年を迎えます。それを記念して、関連事業を実施することとしました。昨年の十二月十五日に記念事業の特別予算を審議するための臨時代議員総会を開催しました。その結果を踏まえて記念事業の概要を同窓会員の皆様にお知らせするため、発刊日がずれた次第です。臨時代議員総会でご承認いただいた主な記念事業は、

- ① 四月に篠山で、十月に神戸大学で記念式典を開催すること
- ② 節電のため主に学生の利用する学舎の照明をLED照明に交換すること
- ③ 附属農場が五十周年を迎え、食資源教育研究センターとして、国の「教育関係共同利用拠点」に認定されたことを祝いネームプレートを寄贈すること
- ④ 七十周年記念DVDを発行することです。

皆様には、裏表紙の神戸大学創立七十周年記念行事のお知らせをご覧ください。是非、同級生をお誘いあわせの上ご参加いただきませうようお願い申し上げます。

今号では、企業の最先端や海外で活躍されている卒業生他お忙しい中、貴重なご寄稿をいただきました。現役学生にも貴重な情報になると確信しております。執筆者の皆様には厚く御礼申し上げます。

(会報担当理事一同)



神戸大学農学部創立七十周年記念事業趣意書

拝啓 新春万福の良き年をお迎えのことと存じますが、兵庫県立農科大学卒業生、神戸大学農学部卒業生、大学院修了生並びに農学部の現・旧教職員、大学関係者及びそのご家族の皆様におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、私たちの母校、神戸大学農学部は、1949年篠山の地に兵庫県立農科大学として建学されて以来、本年で創立70周年を迎えることとなりました。この間、1966年には国立神戸大学への移管、1972年には大学院農学研究科（修士課程）、1981年には大学院自然科学研究科（農理工学系大学院）博士課程の設置、1999年には創立五十周年記念行事が行われました。その後、2004年には国立大学法人神戸大学への移行、2007年には待望の大学院農学研究科（農学系独立大学院、博士課程前後期一貫課程）の設置、2008年には学部改組といった大きな変革に加え、学舎の全面改修による施設の充実がはかられ、2009年には創立六十周年記念行事が行われました。さらに直近の10年間には大学院英語コース（Kobe Global Graduate Program for Agricultural Science）、学生教育のための海外英語研修プログラム、海外連携大学の学生が参加する短期サマースクールの開始などの大学の国際化加速、および附属食資源教育研究センター（旧付属農場）による「神戸大学ビーフ、純米酒（神のまにまに）」の生産に代表される大学のブランド力強化に資する取り組みが行われました。

このたびの創立70周年という節目にあたり、『私たちの農学部70年の歩み』を振り返り、その歴史を築いてきた教員及び同窓生を讃えるとともに、この機会に食料・環境・健康生命に寄与する農学の重要性と使命、及び大学の現状を認識し、未来の農学部に期待を寄せて、この70周年を大学と同窓生が相互に連携し懇親を深める新たな出発点としたいと考えました。

そこで、農学部と六篠会との共同により『神戸大学農学部創立七十周年記念事業』を、ここに実施することいたしました。

つきましては、卒業生、修了生並びに現・旧教職員、大学関係者及びそのご家族の皆様には、何とぞ本趣旨をご理解のうえ、記念事業の遂行にあたり格段のご高配を賜りますとともに、是非、行事にご参加いただきますよう切にお願い申し上げます。

敬具

2019年1月吉日

神戸大学農学部創立七十周年記念事業会 発起人一同

神戸大学農学部創立七十周年記念事業会発起人名簿 （2018年12月27日現在）

（順不同）

（農学部）

河端 俊典、白井 康仁、土佐 幸雄、田中 勉、宮野 隆、野村 啓一、田中丸 治哉、芦田 均、水野 雅史、森 直樹、藤嶽 暢英、万年 英之、石田 章、宇野 雄一、大山 憲二、竹中 慎治、橋本 堂史、深山 浩、乾 秀之、中塚 雅也、福田 伊津子

（六篠会）

中村 直彦、辻 莊一、松井 功、石賀 暢一、武 正興、片山 喜久男、安原 潤、原山 洋、大西 成己、王子 善清、坂井 永利、吉倉 惇一郎、西尾 司、松山 稔、宮島 康彦、鈴木 武志、笹崎 晋史、永吉 照人、南森 隆司、西川 欣一、田中 平義、能宗 康夫、北浦 義久、山本 博昭、前田 泰秀、酒井 修、番匠 宏行、置塩 康之、加納 健三、長谷川 信弘、花本 秀生、阪上 昭宏、財田 福雄、長谷川 明彦、得丸 哲士、松本 幹夫、矢代 学、山田 健次、門岡 織江、松永 將義、兼崎 雅弘、河野 健児、岡田 嘉夫、鳥居 明英、椋本 久美子、小田 哲也、中辻 優香、岩出 郁美、上山 維介、森川 功一、相野 公孝、木村 省三

（12月28日以後の発起人名簿については、六篠会ホームページに掲載します。）

神戸大学農学部創立七十周年記念行事のお知らせ

六篠会会員の皆様におかれましてはご健勝にてご活躍のことと拝察申し上げます。

1949年4月に篠山で兵庫県立農科大学として産声をあげた我が神戸大学農学部は、2019年に創立70周年の節目を迎えます。現在も誕生の地「篠山」には建学を記念する碑があり、当時の学舎も面影をとどめています。創立70周年を迎えるにあたり、4月には春の記念行事を篠山市で挙行いたしますが、その際には記念事業により改修された記念碑をご覧ください。この篠山での記念行事は、農科大学の同窓生の皆様には思い出の地での旧友との再会の場になり、神戸大学農学部の同窓生の皆様には学部のルーツを知る絶好の機会になると存じます。また、10月には秋の記念行事を神戸大学ホームカミングデイに合わせて神戸大学農学部にて挙行します。

皆様には万障繰り合わせの上、創立七十周年記念行事にご参加いただけますようお願い申し上げます。

創立七十周年記念事業会

① 篠山市における春の記念行事

☆日時：2019年4月6日（土）

集合場所・時間：JR三ノ宮駅

10:00 JR三ノ宮駅南の国道2号沿のラウンドワン前

10:30 農学部

11:30 篠山市到着後に記念碑の見学

） 旧農科大学学舎の見学

13:30 デカンショ節の見学と体験

13:50 ささやま荘に移動後に記念式典と懇親会

） 思い出のスピーチ、農業サークルの活動事業の紹介等

15:50

15:50 ささやま荘出発

16:00 JR篠山口駅

17:00 農学部

經由

17:30 三ノ宮駅着



兵庫県立農科大学全景



神戸大学農学部学舎



『兵庫農科大学発祥之地』記念碑

※無料チャーターバスをご利用ください。（往路はJR三ノ宮発・農学部経由で、復路はJR篠山口駅・農学部経由・JR三ノ宮着で運行）篠山会場に直接お越しいただいて記念行事にご参加いただくことも可能です。

② 神戸大学農学部における秋の記念行事

☆日時 2019年10月26日（土）

神戸大学ホームカミングデイとの共同開催 特別企画 研究室自由見学・卒業生による業界紹介（午前に予定）

13:30～16:00 創立七十周年式典 主催者・来賓の挨拶

六篠賞授与式、六篠賞受賞講演（1～2演題）特別講演（1～2演題）

16:00～18:00 懇親会（生協LANS BOX）

③ 参加費等

同封の郵便振込票にてご入金ください。参加費の振込期限は、篠山市での春の記念行事のみ、または両方の記念行事への参加の場合は**2019年2月末日**、神戸大学農学部での秋の記念行事のみへの参加の場合は**2019年9月末日**とします。なお、醸金（ご寄付・協力金）については上記の期限後も随時受付させていただきます。

*篠山市での春の記念行事のみにご参加（懇親会費を含む） 8,000円

*神戸大学農学部での秋の記念行事のみにご参加（懇親会費を含む） 8,000円

*春と秋の両方の記念行事にご参加（懇親会費を含む） 15,000円

*醸金（ご寄付・協力金） 1口、5,000円（以上のご協力を）

☆参加費・醸金を入金いただいた方にはご希望により70周年記念DVD（2,000円相当）を無料でお送りいたしますので、郵便振込票の通信欄に「DVD送付の希望または不要」のいずれかを明記ください。

☆参加費等の入金後の返金は一切受けません。予めご了承ください。

☆行事内容の追加充実・変更等に関する情報は、六篠会のホームページに随時掲載いたします。

☆不明な点については六篠会事務局にお問い合わせください。



自然科学総合研究棟